明治三十年二月二十七日發行

女鑑



第[illegible]二拾[illegible]號

東京國光社

女鑑第百二十七號

目録

内田隆昌の妻



女子の遊學に就きて

玉敷の都と云へば、見るものきくもの皆あはれに美はしく、石切れ木のはしに至るまで、在るものは、何事もめでたく美はしからぬはなく、學びの道なども、殊更に異りたるやむごとなきもののあるが如くに思ひなしてか、とかくにさるべき國々の令孃たちが、何の目的もなく、たゞ〳〵都にのぼりだにすれば、行儀も正しくなり、あはれなる女子の道も修めらるゝやう心得、親々も唯同じ心に許しもはげましもして、徒らに都にさまよひ來る如きものの多かれど、いとおぼつかなく危くればゆる事どもなりかし。

げに都は國の中心となれる所にて、文明のものでとの、聚りに聚り來る所なれば花も錦も天雲とあつまれば、塵も芥も潮とたゞよひ、玉は海原をもうづむべくは

石瓦は大山をもつむべく。美はしくめでたきものも數を知らぬほどなれば、汚くくちをしきものも、また數へ難きばかりなり。よゝ草も榮ゆれば、あゝ草もまたいと茂りて、善き物も數多あれば、惡しきものも又いと多かり。眞言の言葉も春の野邊と萌ゆれば、いつはりの言の葉も秋の山べとちりつもれり。

かゝる善き、惡しき、美はしき、汚きもの、まこと、そらごと、皆聚りに聚りたる所にしあれば、そが善き美はしきまことしき方をのみ見もしきゝもし、れはゐもしたらむには、此の上なきめでたき事にあれど、そがあしき汚きそらなる方をのみ見もきゝもればゐもしたらんには、如何なるあさましき事ならむ。

されば、かゝるわたりにたづねきて、遊學するといふ事は、いと明らかなる目的をたて、いとたしかなる志を有ちてにあらでは、いと危く心もとなき事なめり。定まりたる目的もなく、徒らなる志にて、なまじにかゝるわたりにかりねしてあらむには、色には染みやすく、香にはうつりやすき人心が中にも、殊にうつりも動きも易き若き年頃の心なれば、徒らに都の花にあこがれ、鳥にうかれ、心も空

となる事のみ多く、生花、茶の湯、奏琴などはまだしもの事なれど、敎會の祈禱、夜會の音樂、踏舞の如き奇怪の業など、田舍には見ぬ誠に高尙の敎育と心得、或は衣服をかざり、容貌をつくる事を、故鄕へかざる錦など思ひなすやうの者はれろか、或は太郎作次郎作などの文字の外に、一つ、二つ、角ばりたる字をよみかけば、早如何なるむづかしく天晴なる學問にてもなせしかの如く、思ひ驕り、さては故鄕の人は見も知らぬ怪しき横文字、僅にたどりかきすれば、早めづらしく、上なき學問をなせし如く心得て、古里へ歸りて來ては、親をも侮り、長者にも下らず、飽くまで人を人ならず見下して、田の畦畑の細道踏みならして、ねりあるくに、物知らぬ田舍人も指して笑ふやうなるものとなる事は、定まる目的なくて都のかりねにあしき方のみ習ひかへるが故なり。

學問はもと身を修むるの道、女子は女子らしう、やさしくまめやかに、萬事心づくれば、都の行儀ならはずとも宜しかるべく、なまなか都にのぼりて、高等と稱ふる學問に入らんよりは、家にありて、親にやさしく、長者に正しく、裁ち縫ひ讀

み書き心を用ひて、自ら學ばんこそ、やんごとなき深山の花とも思はるに至るべきを。さなくば、親も、子も、まづ的を定め、その目的をたがへぬやう、よく〳〵心にいましめ、細路に入らぬやう、正しう直ぐに、大道をふみとげんやう心がけての後にこそ、遊學はすべけれ。



論説

女學生に望む

勝浦鞆雄

本編は、客年十二月二十四日、東京府高等女學校に於て、演述したるものゝ筆記なり。爰に女鑑に寄す。

我が國に、女子教育と云ふ事の起りしは、近時の事なれども、昔時の女子も、文學なかりしにあらざるは元より、尚、文學の起らざりし上世より、明に倫理的觀念の備はれるのみならず、勇決果斷、丈夫も及びがたき氣象ありし人々乏からざりき。皇室の御

上に就きて申すは畏けれども、息長足姫命が仲哀天皇の不虞なる崩御の後を受け、御懐妊の御身を以て、日本海の潮流に航して、三韓を征服したまひしは、世界の歴史にも、稀有なる御事なり。其の他持統天皇が天武天皇の文武の大業を成就したまひし内助の御功の高き。檀林皇后が、大に學事を奬勵して、士民の爲に學校を設け、嵯峨天皇と相並びて文運を興したまひし等は、今更稱賛し奉らむも愚なる事なり。臣民の上に就きて觀察せむ、我が邦の婦人か貞順の徳に富めることは、遠く紀元以前よりの美風にして、須勢理姫命大己持命の妃が、『汝をおきて男はなし汝をおきて夫はなし。』と歌ひ給ひしを以ても、その一斑を知るべし。又その勇決果斷なりし事は、上毛野形名が、軍潰え戰負けし時、その妻に勵まされて、更に戰ひて蝦夷を破りしを以ても知るを得べし。誰か、本邦女子に氣節なしと云ふか。

支那文學渡來の後に於いても、天武天皇の口傳を承けて、古代の事實を諳誦せし稗田阿禮も女なりしと聞けり。其の他、萬葉に見えたる多數の女子の歌を見ても、その文學の素ありし事は明なり。平安京になりて、國字の始めて定まり、漢學、佛教の盛に行はれし時代に、漢文を素として、國語にて自由に事物を筆記し、永く我が國文界の美術的模範となれる、源氏、枕草子等は、紫式部、和泉式部等の女子の手に成りし者に

て、其の修辭の巧なる、叙事の富めること、男子も色なきばかりなり。此の時代の女子は、通學すべき學校こそなけれ、幼時より難波津淺香山の習字し、次て和漢内外の書を講讀せし者なり。誰か、本邦女子に文學思想なしと云ふか。

下りて、源平以后となりては、社會一般に、文學は大に衰へたれど、義烈としては、袈裟御前の如き人あり。又阿佛尼の如く、その夫の家の興復に必志を盡せる人あり。越部禪尼の如く、忠實なる行爲をなしたる人もあり。辨内侍の如く、見識の備はりし人もあり。母儀としては、松下禪尼の北條時頼に於ける。楠木正成の妻の正行に於けるが如きあり。又瓜生保の母の如く、長子の王事に死せしに當り、哀の色を現はさす尚次子をして再擧を謀らしめんとせしもありき。（保の忠死も其の母の教訓に本つけるなるべし）是より德川氏の世までを列擧せば、大名士人以上は言ふも更なり其の以下の人の中にも、孝烈貞順の德を全くし、文學技藝に譽ありし人實に枚擧に遑あらす。誰か、本邦婦人に育兒の方を知る者なしと云ふか。

かく我が國の婦人が、歷史に留めたる蹟を通觀すれば、海外の歷史に對照して優良なる人こそあれ、劣れる點は決して見出すこと能はさるなり。されはこそ、其の生々せし我が國民をして、世界に比類少き、名譽なる歷史をば繼承せしめたるなれ。

今より三十年前に於ける女子には、奈なる文教ありしかと云はゞ、女子は内を守りて外面に立たざりし社會なれば、特に女子教育と名づくべき程の者はなかりしかど、中人以下の者と雖も、女大學、女四書、女訓鈔等の書を講讀し、習字、裁縫は元より、中には躾方を修めしもあり。當時の教育は、專ら女子の本分を知らしめ、女德を養はしめんとするに外ならざりき。しかるに、維新以來、歐米の文物を傳へて、社會の事物の總て變動せしと共に、婦女も亦從來の如く、内のみを守りて、外を顧ざる狀態にては、世に立ちがたきに至りしが上に、子弟の教育は專ら婦人に託れは、婦人の教育は國民の教育を進むる所以なりと云ふ旨趣より、女子の學校、女子の教育と云ふことも始まりしかど、新舊過渡時代の常弊として、歷史、風俗全く異なる歐米の有樣を、皮相より見聞して、男女同權とか、女尊男鄙とか云ふか如き理論すら入り來り、一時は忠孝貞順の美風も破潰せられん勢なりしに、大勢漸く定まり、機運また變して、教育の方も、生徒の風も、又漸々正に歸せしは、實に國家の爲にも、一個人の爲にも、慶すべき事と思ふなり。

今の教育は、世に立ち事に當るに足るべき相應の知識を備へんとするを以て、勢、德育に專なること能はさる傾なきことを免れさるより、多數なる世人の中には、父兄の

志も、學生の望も、知識を進むることのみを以て就學の目的とする者あるに似たり。されど、本校の如き、普通教育を施す學校教育の本旨は、畢竟當世に適當なる品よき女子を養ふと云ふ一點に歸すれども、知識を與ふるも目的の一部には相違なきも、之に伴ふべき德育を施すことを目的とはするなり。娘等は元より、娘等の父兄が、娘等を此の校に就學せしむる所以も、亦必此の旨を体して、本校の訓育を仰ぐなるべし。

余の管理する尋常中學校と、本校とは、男女の別あり、隨て其の課程に於ても、自然多少の繁簡難易はあるべけれども、學校の性質より云ふときは、均く普通教育の終極に當り、其の年齡より云ふも、境遇より云ふも、全く趣を一にせり。初等教育に於いても、專門なる學校に於いても、人物を養ふと云ふことに於いては、固より同一なるが中に、中等教育に於ては、特に重大なる關係を、國家にも、個人にも有せり。奈れは、此の教育を受けし者は、他日社會の機關となるべき、即、國民多數の中に於て、首要なる位置に當るべき人種たるを以てなり。未來の社會の趨向、國家の福祉は一に中等教育を受けし人によりて、隆替盛衰の差別を來たすか故なり。娘等の國家に對し、父祖に對して有する所の重任は、此の教育によりて成立つなり。故に、本日、娘等に對して一言を呈する機會に接し、憚りなく意見を陳せんとするなり。

（未完）

女子教育一斑（三十五）

三輪田眞佐子

第一　擧止を注意すべし。　体育に影響する事項少なからざれども、中につきて、擧止は、日本女子の最も注意すべきものぞかし。そは、我が國女子の擧止は、攝生の道に違ふのみならず、擧止と体育の關係を知らざるものさへあればなり。

をさ〳〵、天地間萬物の法とすべきものは、天然にこそあれど、女子の起居動作も、つねに、おのづからなるまゝに行ふべし。彼の、わざと、男子めきたる風体をかたどる女子の、その道に適はざると等しく、ことさら、頭を垂れ體を屈し、あるは脚を縮めて肅敬の容姿なりと信ずるも、亦、その道を離れたるものなり。孔夫子の、「色勃如たり、足躩如たり。」など、いひけんは、恭敬の心のおのづから外に現はるゝものなり。なぞか僞の擧止を作らん。おのれは、女子に、道徳上、女性のまゝなる進退を望むと共に、その體育につき、天眞のまゝなる擧止をなさまほしうなむ。

そも〳〵、人は、つねに充分なる呼吸をなすは、肝要なるものを、天眞のまゝなる擧止をなさゞる女子は、獨坐の時だに、乏しき呼吸をなすめり。あるは胸部を壓するは、肺臟などに害あるを思はざるが如し。その他、これに類する攝身法によりて、身体の發育、及び、血液の循環を惡くする傾あるは、多く言はずとも知らるゝことなり。況

して、女子の品格を高むるには、卑屈らしき擧動をなすべからず。必ず姿勢を端正に持つべし。

まことや、卑屈のふるまひは、一般妓娼の媚を呈するわざにして、窈窕たる淑女のまねぶべからざることなり。元來女子は、愛嬌に富むべきながらも、禮なき男子は狎れ近くべからず。つねに、威儀粛然と備りて、天眞を曲げざる風采こそあらまほしけれ。これ身を神聖に保つ道なるのみならず、精神を爽快になし、身躰の機能を圓滿ならしむる所以ならん。

第二　習慣を改むべし。　婦女の習慣にして、目下攝生上の害となるべきもの、枚擧に暇なきばかりならんも、これらを逐一述べんには、煩はしければ、省きて唯その一二をあげ、讀者の猛省を促すになん。

女子は、なべて長坐の僻あり。おもふに、この僻は、靜粛忍耐などの女徳とおもひしものゝ、極端に馳するがためか、若しくは、終日裁縫などをつとめつゝ、一室に閑坐する積習に基くものならんか、兎まれ角まれ、足部の發達を妨げ、消化の作用を鈍くするなど、衛生上よろしからざるを以て、とく改むべきことなりかし。

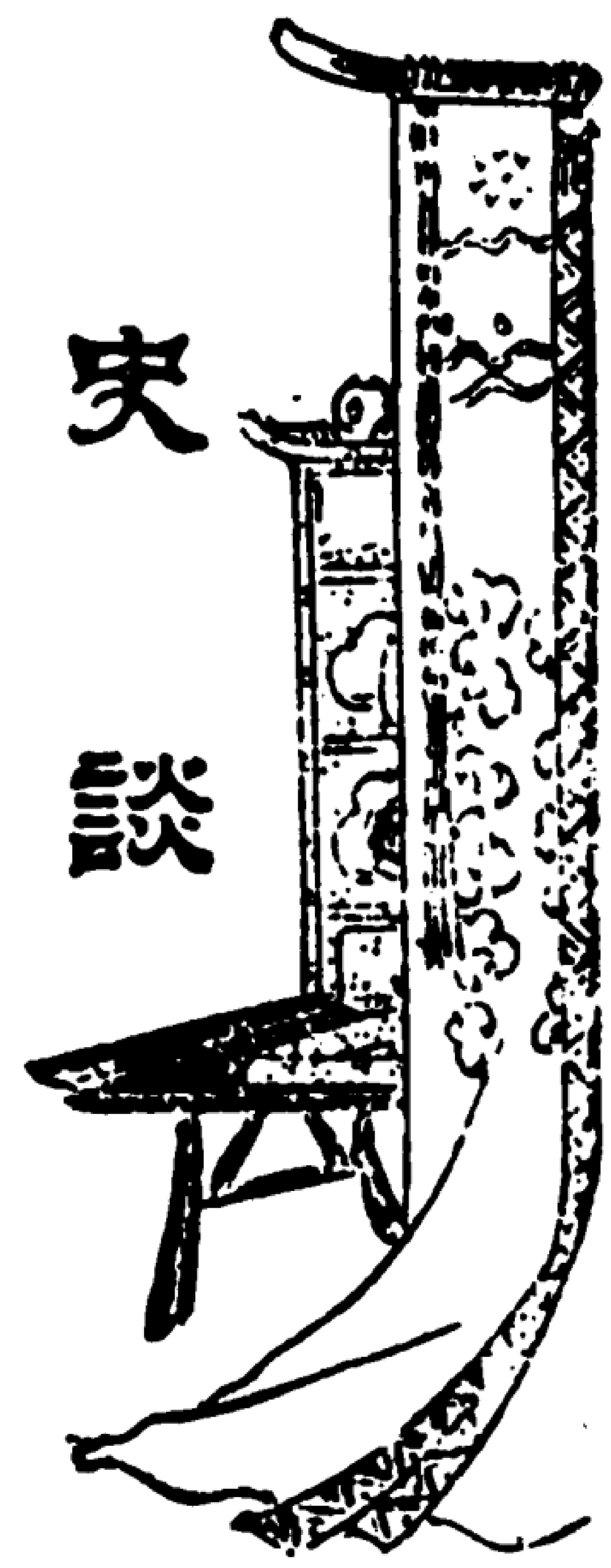
無識の女子は、身躰の孱弱なるため事に堪へざるものを以て、優美と誤り、朝な夕な、

止みがたきことすら、力を要するを拒めり。されど、人の筋肉は、應分の運動をなしてこそ發育するなれど、強て男子と同じき力役をなすは非なれど、女子相應の筋骨を用ふることの必要をな忘れそ。見よ、たすきあやどりて、炊事に、洒掃に、甲斐甲斐しく、打ち働く女子を、人は賤しと言はんも、おのれはその健なるをこよなくめでん。亦女子には、沈鬱緩慢などの弊風あり。こも速に改めて、何ごとにまれ、輕快の業を嗜むべし。輕快の習慣を養ふときは、疾病もその機に乘ずる能はざるものぞかし。彼の昨日は頭痛、今日は服痛と苦む婦人は、概ね輕快ならざるものならんかし。

その外、わが國婦女の習慣につき、改良すべきふし多けれども、以下折にふれてものすることこそ反りて便利なりと信ずれど、讀者その心してよ。

貝原益軒

養生に四要あり、暴怒を去り、思慮をすくなくし、
言語をすくなくし、嗜好をすくなくすべし。
又曰く　久しく行き、久しく坐し、久しく立ち、
久しく臥し、久しく語るべからず。



史談

内田隆昌の妻

鹽井ふく子

鷦鷯深林に巣くふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飮むも滿腹にすぎず。飽く事をのぞむべからず、高屋を願ふべからず。清潔、廉潔、人はたゞ清きを以て貴しとす、人はたゞはてらぬを以て能となす。内田隆昌の妻、その名を何と呼びけん。たゞ鳴瀧清長なる父の氏名を、とこしへに流れしむるも、孝の終りにや。

初め、夫隆昌、足利將軍につかへ居りしが、一朝、將軍の旨に忤ふを以て退けられ、西山と云ふ山中にかくれ居りぬ。ふちにはなれし痩浪人の、たつる烟もほそく、木の實、草の根、夫婦が玉の緒をつなぐ能はずして、西山の夕日、影淋びしくも、ればつかなきさまなり。

隆は身をたすくとや、幸に、その妻、弓射るわざにすぐれたりければ、日に山中の鳥類を射て、以て物にかへ、かつ〴〵その日の生活をいとなみぬ。

ある日例の如く弓をわきばさみて、小鳥を追ひに出でけるに、たま〳〵將軍の列にあひぬ。將軍その妻女のあやしきよそほひをあやしみ、彼は、何をかなすものぞと問はしたまひしに、妻、實を以て答ふる折りも折り、忽然雉一羽、前にとびたちしに、將軍之を見て、彼れを射て見せよとのたまふに、妻女たゞちに、矢をつがへ、ひきはなちしに、ねらひあやまたず、雉は尾を貫かれて、將軍の馬前に落ちたり。將軍大によろこび、已が馬前に從はしめ、また遙の大空をかける白鳥を指してのたまふは、彼處になは白鳥のとび居りぬ。雲井へたつこといとはるかなれば、汝、なは、よく、これをも射るやとありければ、さればよ、如何に侍らんか、試み申さんとて、妻女は靜に矢をつがへ、小蝶の如き白鳥めがけて、ひきしぼりしに、一箭あやまたず。白鳥はたゞ中を射貫かれて、翩々とさながら木の葉の風に吹きまかれる如く、大地に落ちしに、將軍嘆賞限りなく、金銀あまたとり出してあたへんとするを、妻女は辭するやう、金銀珠玉、さばかりのあたへあるものには候はず、たゞ粟一斗を與へ玉へば足り侍り、そをとらせ給へ、餘の物はほしからずとて、れしかへせしに、さても〳〵、世に如何なれば、汝如き事を云ふとて、つく〳〵とながめらるゝに、妻女なは答ふるやう、妾、向に將軍の鹵簿を拜しまつりて思ふやう、今日は鳥を射ること能はず、一日の糧とゝの

へがたしと、心ひそかにうれひ侍りしに、幸、君にゆるされまつりて、双禽を獲候ひしうれしさ、そが價値はどの米粟を得候はんより他に、何をか求め侍らんと云ふ。將軍ます〳〵その言行の廉なるを感じて、望の如く粟一斗をとらせ、さて、汝は如何なるものゝ妻ぞや、名のれよかしと云へども、妻女はなほ從容として、こは、妾が身ひとりにてなせし事にて、夫の知る處には侍らねど、いかで夫が名をわづらはし申さんやとて、その名を云はぬを、なほ再三再四、固くとひすがるに、夫は武士にて候とばかりに、遂に拜辭してその場を立ち去りぬ。その歸るさ、鷺の群れたつを見、一矢また双翼を貫き、今日は誠に幸の多き事かなとて、僅にはゝ笑み行きけるに、將軍をはじめ、人々いたく感嘆して、そのうしろかげ見えずなるまで見送りぬ。

將軍、なほその如何なる人の妻たるやを知らんとて、ひそかに人をして跡をつけさせ見しに、隆昌の婦たるよしを初めて知り、速に夫が前日の罪を釋るして、もとの職にふくさしたまひぬ。

夫の姓名をもうち明けざりし妻女、夫にもまたわりし事どもをつゝみ居りけん、何事も知らざりし隆昌、官に至り、初めて、前日の婦が働きを知り、よろこびて婦に謝せしに、さては誰をかはつげけん、知らざりしをろかさとばかりに、妻女はうち笑ひつ

ゝ何の謝し給ふ事やはれはする。武士の妻、たま〳〵小禽を射候が、何の奇とするに足り侍らんやとて、さのみは、ほこりたる色もなかりしとぞ。一箭飛禽をあやまたぬ能を、なほ能とせざる至能。家道衰へて、赤貧あらふが如き中にも、なほいたづらに千金を受けざる廉直の志、げに武士の妻に恥ぢざる妻女にこそ。肥甘あくを知らず、淺知なほ誇らまほしうする狹心私欲と呼びなされたる女心、我もまた。此の妻女の鏡にてらしみて、あけられ自警せんものをとてなむ。

猪兵衛が妻の事

薫風仙史

備前の國、和氣の郡、伊部村に住める農に、猪兵衛といふ人あり。妻某いとよく舅姑に事ふ。一人の女の子をうめりしが、後十年ばかりありて、夫癩病にかゝれり。妻骨身を惜ます、心をつくして、看護に怠なかりしかども、六年を經て、病いやましに重りゆくに、猪兵衛妻をまくら邊に近くよびよせて、いへるやうは、汝年ごろ身をわすれて、看護怠るなきこと、うれしさ何かこれに及かん、しかれども、わが病は、遂に癒ゆべきにあらず。事に家極めて貧し、わが身は今かくて果てなんも、などてか惜しからん。汝が身は年まだふるしとにもあらず。けふ離婚せんに、何處になりとも、よき

緑をもとめて、再他に嫁きて、よき一生をおくれよ。われ病みながら、心いたつて、汝が面を見るに忍びず。今はとく去ねよ。これわが願なりといひて、幾度かくりかへし〳〵、くどきさとせども、ふつに諾ふべくもなし。たゞ夫の病を憂きかぎりと思ひて、看護前日にかはることなし、かくて家益まづしくなりゆくに、せんかたもなくて、みづからわが身を賣りて、人の婢となりて、得たる給分を一錢だもわがものとせず。あるかぎり舅のもとに贈れり。かゝること三年にして、後家にかへりしかども、窮乏むかしにかはらず。舅姑夫と共に言をつくして、去りて、一身をたてん計をせよと、說きさとせども。妾いまこの病人を見すてゝ、はたいづこにかねゆかんといひて諾はず。猪兵衛が病いよ〳〵重りゆくに、かてゝ姑も亦病の床にふせり。妻一人して家のなりはひをつとめながら日はひねもす夜はよもすがら、みとりに怠ることなくわが身をわすれてはげみつとめたりしに、人みなその孝貞の心に感せざるはなかりしといふ。時の領主池田從綱政これを聞きゝて、米若干を賜ひて、賞めけりとなん。



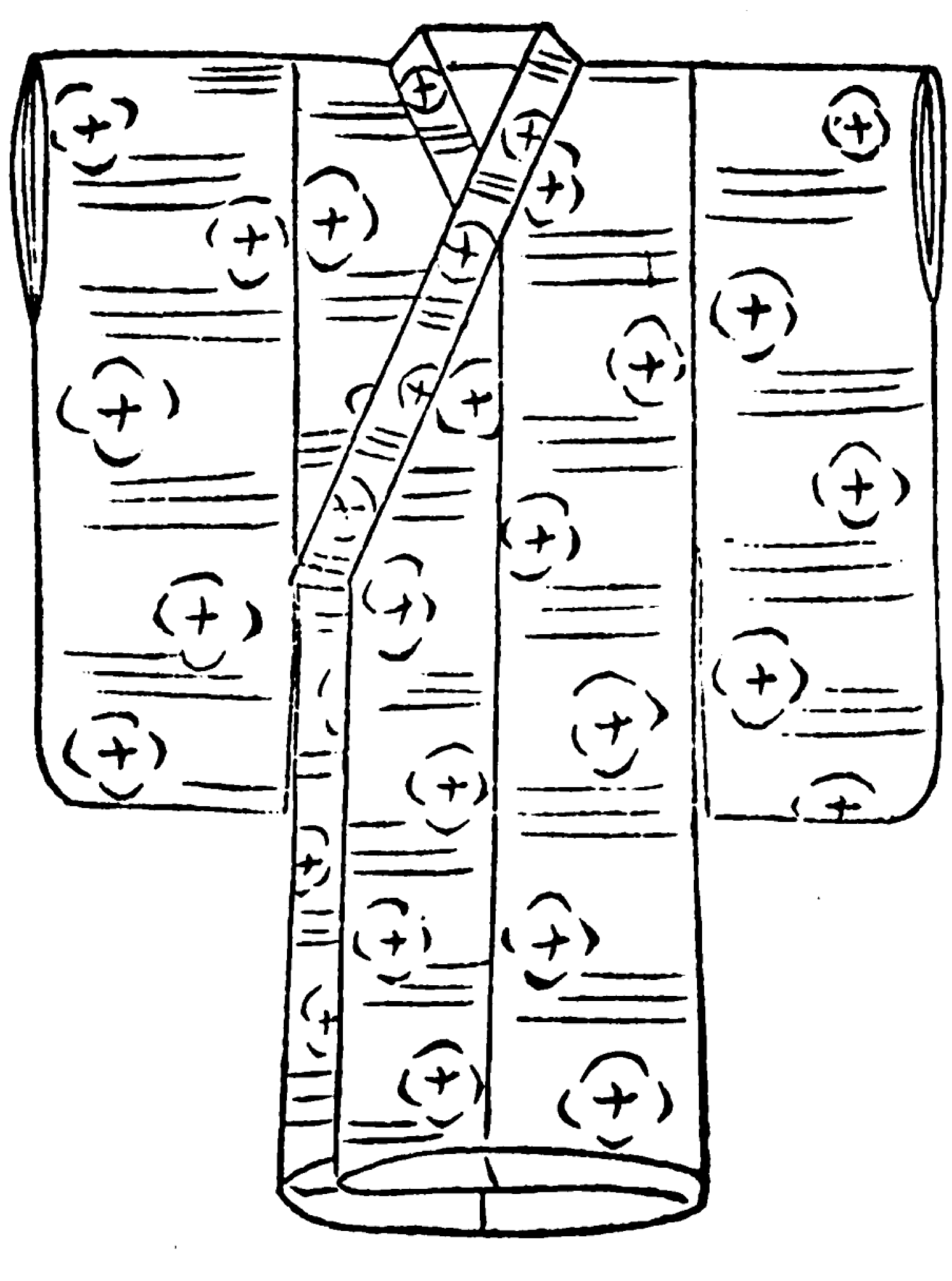
政

たちぬひ

西山たい子

(六十四) 惣摸様のぬひ方

惣摸様は、まづ最初に、その切れをその人に應じてよきやうに裁ちきて、前、うしろ、袖、襟等の巾と丈とを定めて、平縫をして、下繪をかき、染め上げてより縫ひ箔を裏にあて紙をしてぬひとるなり。仕立方もむづかしきもの故、よく／＼もやうを合せまちがはぬやうぬふべし。この摸様ものは、上等の家などにては儀式の折り用ゆれど、通例の人は婚姻の時のみに用ゆるもの、さるめでたきものものなれど、ぬひ方もまためでたからずばあるべからず。



造花

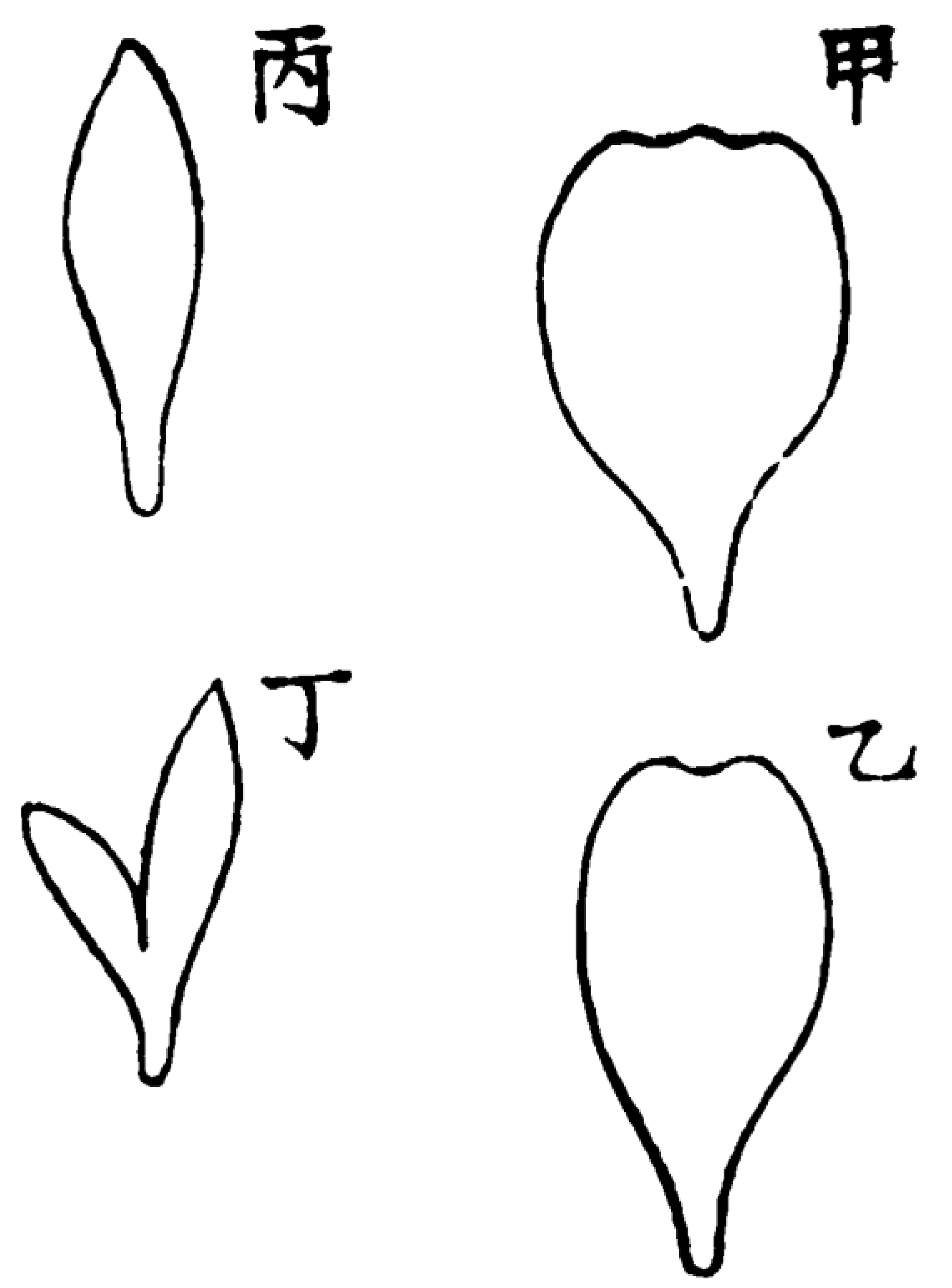
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

山吹

山吹には、八重、一重など二三の種類あれど、こゝには、就中最も美麗なる、俗に千重と稱ふるものゝ造り方を示すべし。

滿開花の造り方。　花瓣は、前號の海棠と仝じく、羽二重、又は寒冷紗にて造る。色は、初め「ヨーシン」にて、櫻の如し極く薄く下染し、後「オウラミ」にて濃く染め上ぐべし。乾きたれど、第六十圖の如く、四種の形に、各數十枚を造り、之に鏝をあつ、丙丁の花瓣は、筋鏝の小にて、中央を縦に引きて内部に

第六十圖



卷き縮らし。甲乙は瓣鏝の小にて、花瓣の右の方を表より引き、左の方は裏より引きて、各反對の向きに縮らすべし。斯の如く花瓣を造り了りたれど、更に萼を造るべし。

萼は、青紙にて、梅の萼と仝じ樣に造り、之に前の花瓣の甲、五枚を付け、后丙五枚を付け、后又甲五枚を付け、次に丙五枚、次に乙五枚、次に丙五枚、次に乙五枚、次に丙五枚を付け、后より丁二十枚を付

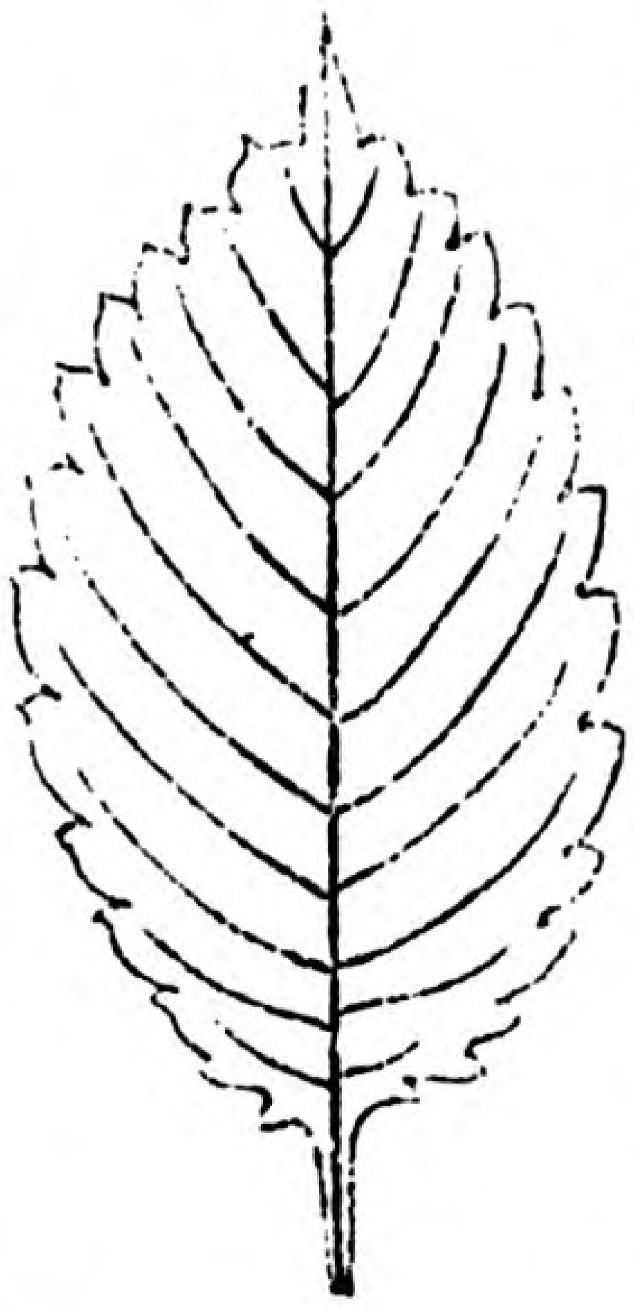
く。之にて滿花一輪となるなり。

半開花の造り方。　花瓣は、滿開よりも少しく深く窪まし。滿開の半數、即ち甲乙各五枚、丙丁各十枚にて造る。纏め方等は、凡て滿開と全じ様にすべし。

蕾の造り方。　蕾は第百十八號に示したる薔薇の蕾と全じ様にして、極く小く造り、色は「オウラミ」にて染むべし。

葉の造り方。　葉は。第六十一圖の如き形に、大中小三種を造り、色は、薔薇の葉と全じ様に「グリン」四分、「マセンダ」一分、「オウラミ」六分の溶液に、明礬少許を加へたる色に染め、中、小の葉は「オウラミ」にて少しく黄色みを付くべし。

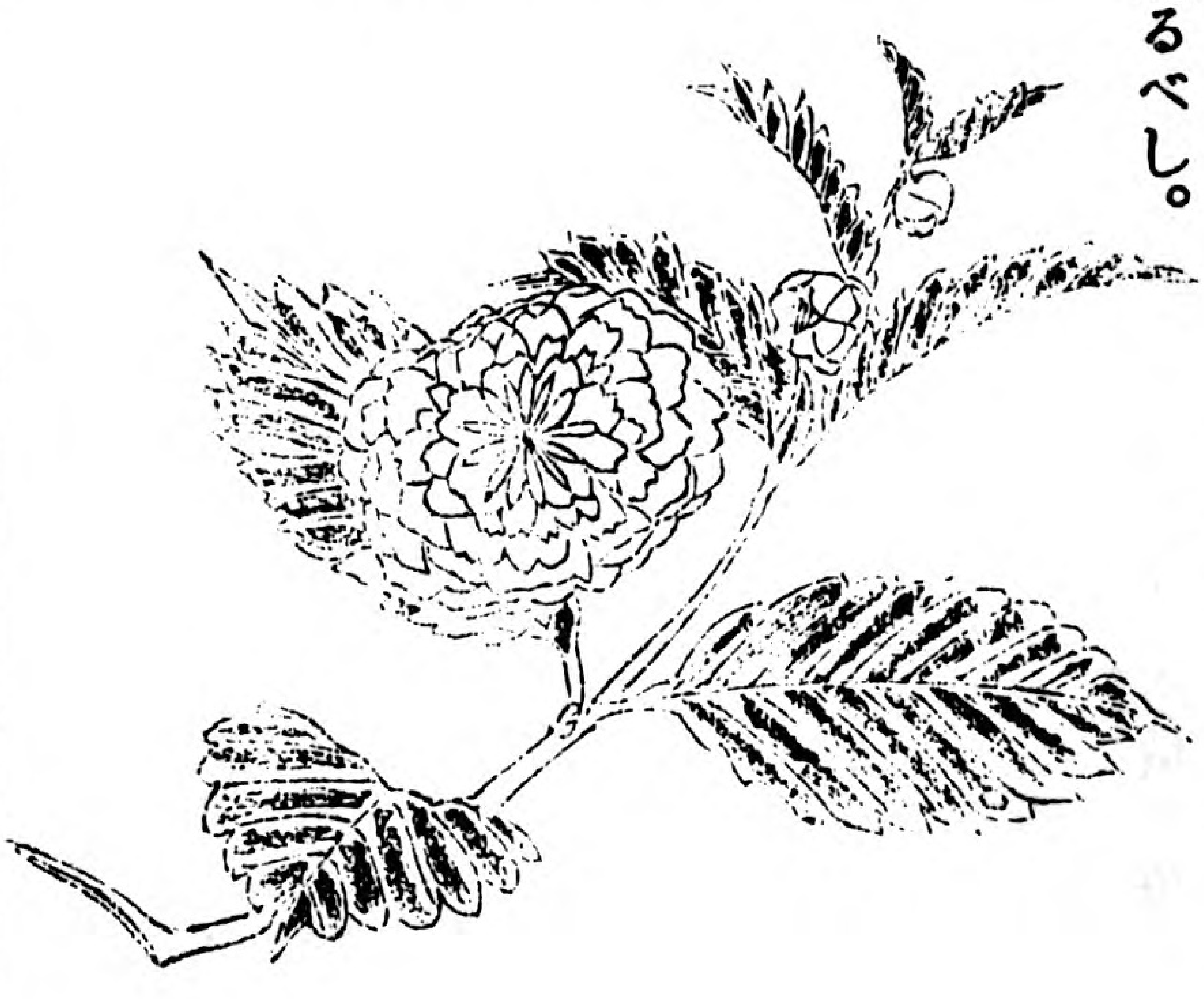
第六十一圖





纏め方は、實物を見合して、宜しき恰好にすべし。幹には、中に竹の削りたるものを入れて、上に青紙を卷く。簪なれば、蕾、半開二三を纏めて好みの大さに造るべし。

第六十二圖



だいどころ

馬鈴薯の煮方

此の薯は、皮附のまゝ煮ると、又皮を剝て煮るとの二法あり。皮附のまゝ煮るには、薯の皮を、傷めざるやう、能洗ひ、「ソース」鍋に投れ、其の隱るゝ程水を注ぎ、大匙半杯の食鹽を和し、鍋に蓋をなし、文火にて軟かくなる迄煮るべし。其煮えたるを試るには、串を通し、其の串能く通れば湯をこぼし、火氣を減し、鍋の蓋を、少し透して、薯につき居る水氣を蒸發せしめ、其の乾きたるを待、暖ためたる皿に盛り、皮を入れる器を、添て出すべし。

又皮を剝きたる方は、薯を能く洗ひて、薄く皮を剝き、一旦水に浸し、直に「ソース」鍋に投れ、薯の被る程水を投し、能程の、食鹽を加へ、蓋をなし、文火にて煮るべし。煮えたれば、湯をこぼし、薯に淸き布巾をかけ、火氣を減じ、十四五分間、火にかけ置くべし。然すれば、薯に含める水氣布巾に吸收せられて、蒸したる如くなるものなり。之れを盛るには、又暖ためたる皿をよしとす。薯は成べく同じ大さの物を用ふべし。

赤茄子の煮方

赤茄子を皮のまゝ、能程にきりて鍋に投れ、其上より、胡椒と食鹽をふりかけ、少量の水に小匙一杯の酢を加へ、之れを茄子に注ぎ、凡そ十分間煮るべし。但し、之れは、肉類の妻に用ふるものなり。

菠薐草の煮方

菠薐草を能く洗ひ、鹽を入れ、湯煮としたる後、能程に刻み、之れに「バタ」、肉汁、及び醬油を加へ、五

六分煮て、妻杯に用ふるも佳し。

球葱の煮方

玉葱六七個の表皮を剝きて、之れを能程にきり、一時間程鹽水に、漬けたる後鍋にとり、一合の牛乳を二合の水に和し、之を、葱にかけ、十分間程文火にて煮、軟かになりたれを皿に移し、溶牛酪、胡椒、食鹽等を加へて用ふべし。



日本文典（二十六）

鹽井正男

過去助動詞には、なほ「けり」「き」の二種あり。

「けり」。これは、「來經有り」の約まりて「けあり」と成り、それが、また約まりて、「けり」と成れるなり。此の「けり」の「け」は、「來經」の約まりたるものにて、彼の萬葉集の歌などに、

草枕この旅のけに妻さかり
　家路おもへむ生けるすべなし

とある「旅のけ」の「け」の如き「月日の久しくなる」をあらはす詞と全じものなり。それに「有り」のかゝりて、約まりたるものなり。故に自ら過去の意を示す

やうになれるなり。動詞につゞくには、動詞の連用の格の下に續く、而して其の語尾の活用するさまは、

將然	終止	連体	已然
けら	けり	ける	けれ

連用の格は見えず。將然の格もいと稀れにて、萬葉集の八の卷に、

　この花の一夜の中は百草の
　　言もちかねて折られけらずや

とあるを見るのみ。その他の例は、動詞の時に就きて云へる條を見るべきなれど、

今は昔、廣澤といふ所に、寛朝僧正と申す人おはしけり。この人、たゞ人に非ず、式部卿の宮と申しける人の御子なり。眞言の道に、やむごとなかりける人なり。廣澤に住み玉ひけるに、亦仁和寺の別當におはしけれど、云々。

（今昔物語）

此の「けり」は、元來は過去をあらはす詞なれど、歌などには、殊に過去の意には非ずして、單に嘆息の意をあらはすに用ふること多し。古今集に、

　みやまには松の雪だに消えなくに
　　都は野べの若菜つみけり

とあるは、やがて、此の一例にて、この歌の意は、「深山には未だ松に降りかゝりし雪も消えざるに、都にては最早若菜を摘むワイ」と現在の景色を見て詠嘆せるにて、此の「けり」は、俗に「ワイ」と云ふやうなる嘆息の意となりて、「摘んだ」と云ふ如き過去の意にはあらざるなり。

なほ一首の例をあぐれど、全集に

　世の中にふりぬるものは津の國の
　　ながらの橋と吾となりけり

とある「けり」も、全じく嘆息の意をあらはせるにて、「世の中に舊りぬるものは、ながらの橋と吾とであるワイ」と詠嘆せるなり。

「き」この詞の「けり」と異れる古へのことは、前にあげたれど、こゝには更には云はじ。既に終りれる動作をあらはすに用ふる詞なり。其の活用するさまは、

終止	連体	已然
き	し	しか

にて、將然の格と連用の格とは見えず。動詞に續くには、通例は、其の動詞の連用の格の下に續くべきなれど、不規則動詞には、連用の格のみならず、將然の格の下に續くを得る如し。そは例へど、「來し人」とも「來し人」ともいふにて知るべし。「來」は加行變格の動詞なる「來」の連用の格にて、「來」は其の將然の格なり。

陸奥守鎮守府將軍顯家卿（中路）十四日に江を渡りて坂本に參りしかど、官軍大いに力を得て、山門の衆徒までも萬歲をよびき。義貞朝臣は筑紫へ下りしが、播磨の國に朝敵の黨類ありとて、先づこれを對治すべしとて、日を送りし程に五月にもなりぬ。（神皇正統記）

なるとよりさし出されし船よりも
われぞよるべも無き心地せし
（後撰集）

新古今和歌集講義（七）

鹽井正男

日吉社によりて奉りける子の日の歌

皇太后宮大夫俊成

さゝ浪や志賀の濱松ふりにけり
　　誰が世にひける子の日なるらむ

○子日、正月の子の日にて、此の日、昔の人は、野べ岡べに出でゝ、松の下に席を敷きて遊び、或は松を引き、或はわが家に松を移し植ゑなどして遊ぶなり。子は十二支の初めなれば、一年の初めの月の此の日に、千代の松にあやかりて、行末久しからむことをいはふなり。正月の初めの子の日を、初子の日といひ、次の子の日を、たゞ子の日と云ひて、かゝることとして祝ふなり○さゝ浪や、「さゝ浪の」と仝じ、さゝ浪は近江の土地の舊名にて、故に、近江の志賀、大津などの枕辭に用ふるなりと云ふ○濱松、湖水の濱邊の松○子の日なるらむ、子の日の松なるらむの意なり○ふりにけり、「年をとりて舊く成つたワイ」といふ意にて、此のけりは嘆息の詞なり○

○一首の意は、志賀の濱邊の松は、甚く年をとりて舊びたワイ。かゝる舊き都のわたりの松なれば、定めて昔の子の日には、大宮人にも引かれたらん松ならむに、誰が昔の時代に、如何なる人が子の日に引きたる松ならむ、あはれに殘りたる姿よと、濱邊の松を見わたして、感慨せるにて、いとけしきも餘韻も籠れる歌なり。本居翁は、下の句の「誰がよに引ける子の日なるらむ」の詞づかひ苦しとて、難ぜられたれど、かゝる口つきは、歌には多くあなることにて、且つ、上の句に濱松の松字あれば、子の日の松と云ふべきを、松をはぶきて、子の日とのみ云へるなり○

　　百首歌奉りし時　　　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る浪も聲立てつ

鶯さそへ春の山風

○藤原家隆、中納言光隆の子。歌を藤原の俊成に學びけるに、俊成、はやく其の非凡の人たるを鑑き稱しけるが、遂に定家卿と並び立ちて、此の道の達人と世にもてはやさるゝにいたりぬ。後鳥羽院、歌を學び給はむとして、誰れを師とすべきかを、藤原の良經に問はれ給へるに、良經は、家隆こそ實に當世の人丸なれとさへ稱して、これを薦めたりと云ふ。○此の歌は古今集なる「谷風にとくる氷りのひま毎に打ち出る波や春の初花」「梅か香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」の二首の歌を取り合せて、よみなせる歌なり○谷川のうち出る浪、谷川の結びつめたる氷りの、所々解け初めて、その間よりうち出る浪のことにて、前にあげたる古今集の歌の「とくる氷りのひまごとにうち出る浪」の意なり○鶯さそへ春の山風、春の山風よ、鶯をもさそひ出せと誂へ云へるなり。

○一首の意は、春の谷風吹き初めて、谷川の氷も解け初め、うち出る浪も音を立つるやうに成りしぞ、さるに、鶯は未だ鳴かぬ。されど、春の山風よ、風を吹き送りて、深山の鶯に春の來たりしを報らせて、鶯を誘ひ出して、鳴くやうにしてくれろよと、誂へたるなり。詞づかひの巧みなるを、よく〳〵見知るべし。

和歌所にて關路鶯といふことを　太上天皇

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に
杉の葉白き逢坂の關

○和歌所、和歌の撰集の事を司る所にて、村上天皇の天暦の頃より、はじめて設けられたるものに

て、別當、開闔、寄人などいふ官人ありたり、こゝに、太上天皇と申すは、前にも云へる如く、後鳥羽院の御事にて、土御門天皇の建久元年に、後鳥羽上皇が和歌所を置き、源の家長を開闔に、鴨の長明、藤原の清範、藤原の能秀などを寄人とせられし事あれど、此の和歌所は、其の時のものならむ。○此の歌の下の句は、或本には杉の葉白し逢坂の山とあるあり○鶯の鳴けどもいまだ降る雪にとある上句は、古今集なる「梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けども未だ雪は降りつゝ」の歌を取りて云はれたるなり○逢坂の關、近江に在り。

○一首の意は、鶯も既に鳴きて、春のけしきもればゆれど、なほ雪の降るまゝに、逢坂の關は杉の村立も眞白なりと、ながめうたへるにて、鶯も鳴きてや、春めきたるけしきが中に、なほ雪は降りて、杉村の木ずゑなどの眞白に見えて、何となく面白き初春の逢坂山の景を思ひよせて、よみたまへるなり。

堀河院に百首歌奉りける時殘雪の心を讀み侍りける　藤原仲實朝臣

春來ては花とも見よと片岡の
　松の上葉にあわ雪ぞ降る

○片岡、大和なる名所、或は山城にも、全名の所ありと云ふ。○あわ雪、前に云へり。

○一首の意は、春來たりては、花とも見よとて、片岡の松の木ずゑの上葉に、面白くあわ雪の降りかゝるワイと云ふにて、春は花の賞すべき時節故に、「春來ては花とも見よと」と云へるにて、また、われにしか見よと、あわ雪に心ありて、われに誂へるかの如くに云ひあやなしたるにて、つまりは、唯

片岡の松の木ずゑに降り懸る春のあわ雪の面白さを賞めたる意なり。



漫録

雨月物語（續）

上田秋成

夢應の鯉魚

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。嘗に畫く所、佛像山水花鳥を事とせず。寺務の間ある日は湖に小船をうかへて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊躍を見ては畫きけるほどに、年を經て細妙にいたりけり。或ときは繪に心を凝して眠をさそへば、ゆめの裏に江に入りて、大小の魚とともに遊ぶ。覺れは即見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名付けり、其の繪の妙なるを感て乞要むるもの前後をあらそへど、只花鳥山水は乞にまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必しも與へずとなん。其の繪と俳諧とゝもに天下に聞え

けり。一とせ病に係りて、七日を經て忽に眼を閉ぢ息絶ゑてむなしくなりぬ。徒弟友どちあつまりて歎き惜みけるが、只心頭のあたりの微し暖なるにぞ、若やと居めぐりて守りつも三日を經にけるに、手足すこし動き出るやうなりしが、忽長嘘を吐て、眼をひらき、醒たるがごとくに起かへりて、人々にむかひ、我人事をわすれて既に久し、幾日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息たゑ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦まじくかたり給ふ殿原も詣給ひて、葬の事をもはかり給ひぬれど、只師が心頭の暖なるを見て、柩にも藏めでかく守り侍りしに、今や蘇生給ふにつきて、かしこくも物せざりしよと怡びあへり。興義點頭ていふ、誰にもあれ一人檀家の平の助の殿の館に詣て告さんは、法師こそ不思議に生侍れ、君今酒を酌鮮き鱠をつくらしめ給ふ、しばらく宴を罷て寺に詣てさせ給へ、稀有の物がたり聞ゑまゐらせんとて、彼人々のある形を見よ、我詞に露たがはじといふ。使異しみながら彼館に往きて其の由をいひ入れてうかゞひ見るに、主の助をはじめ、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌ゐたる。師が詞のたがはぬを奇とす。助の館の人々此事を聞て大に異しみ、先箸を止て、十郎、掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて路次の勞ひをかたしけなうすれど、助も蘇生の賀を述ぶ。興義先問ていふ、君試に我いふ事を聞せ給へ。かの漁父文四に魚をあつらへ給ふ事ありや。助驚きて、まことにさる事あり、いかにしてしらせ給ふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入り、君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大なるを啗ひつゝ奕の手段を見る。漁

父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛たる桃をあたへ、又盃を給ふて三献飲ましめ給ふ。鱠手したり顔に魚をとり出て鱠にせしまで、法師がいふ所たがはでぞあるらめといふに、助の人々此の事を聞きて、或は異しみ、或はこゝち惑ひて、かく詳なる言のよしを頻に尋ぬるに。興義かたりていふ、我此頃病にくるしみて堪へがたきあまり、其の死たるをしらず、熱きこゝちすこしさまさんものをと、杖に扶られて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き〳〵て、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴て遊びなんとて、そこに衣を脱去て、身を跳らして深きに飛入りつも、彼此に游めぐるに、幼より水に狎なれたるにもあらぬが慾ふにまかせて戯れけり。今思へば愚なる夢ごゝろなりし。

されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず、こゝにて又魚の遊びをうらやむこゝろおこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ、師のねがふ事いとやすし、待せ給へとて、杳の底に去と見えしに、しばしして、冠裝束したる人の、前の大魚に胯がりて、許多の鱗魚を率ゐて浮び來たり、我にむかひていふ。海若の詔あり、老僧かねて放生の功德多し、今江に入りて魚の遊躍をねがふ、權に金鯉が服を授けて、水府のたのしみをせさせ給ふ、只餌の香むしきに昧まされて、釣の糸にかゝり身を亡ふ事なかれといひて去りて見えずなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へてひとつの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はで、尾を振り鰭を動かして心のまゝに逍遙す、まづ長等の山おろし。立ゐる浪に身をのせて、志賀の大湖の汀に

遊べど、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき、ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に澄て、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山。竹生島。波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ、さしも伊吹の山風に、旦妻船も漕出づれど、芦間の夢をさまされ、矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追れぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。急にも飢て食はしけなるに、彼此に求食り得ずして狂ひゆくほどに、忽文四が釣を垂るるにあふ。其の餌はなはだ香し。心又あ伯の戒を守りて思ふ、我は佛の御弟子なり、たとし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲べきとてそこを去る。しばしありて、飢ますゝ甚しければ、かさねて思ふに、今は堪へがたし、たとへ此の餌を飲むとも、嗚呼に捕れんやは。もとより他は相識ものなれど、何のはゞかりかあらんとて遂に餌をのむ。文四はやく糸を收めて我を捕ふ。こはいかにするぞと呼びぬれども、他かつて聞ず顔にもてなして、縄をもて我腮を貫ぬき、蘆間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて君か門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奕して遊ばせ給ふ、掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感させ給ふ。我其のとき人々にむかひ、聲をはり上て、旁等は興義をわすれ給ふか。宥させ給へ。寺にかへさせ給へと連りに叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍て喜び給ふ。鱠手なるもの、まづ我兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪すませし刀をとりて、爼盤にのばし既に切るべかり

しとき。我くるしさのあまりに、大聲をあげて、佛弟子を害する例やある、我を助けよと叫びぬれど、聞入ず。終に切らるゝとおぼえて夢醒たりとかたる。人々大に感異しみ、師か物がたりにつきて思ふに、其度ことに魚の口の動くを見れど、更に聲を出す事なし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれとて、從者を家に走しめて殘れる鯰を湖に捨させけり。興義これより病愈えて、杳の後天年をもて死ける。其終焉に臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義か繪世に傳はらず。其弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を畫しに、生る鶏この繪を見て蹴たるよしを、古き物がたりに載せたり。

東塢鶴聲

朧　昔　生

此の書は、信濃安曇郡、十日市の人、内山眞弓ぬしが、香川景樹翁の東塢塾にありて、修學のをり、翁の説を聞くがまゝに、筆記せられしものなり。其の目三百餘條に及べり。今いさゝか抄出して、同好の人に寄す。

餞　うまのはなむけ。こは驛の初設なり。はなは万葉十九、卯花をくだす霖雨の水はなに、とあるはなり。むけは、備ふる意にて、手向のむけなり。驛の初に餞宴することなり。馬の鼻を行方へ向ると云ふ説は、ふさはしからず云々。

ウシロメタシ。　堀川百首に國信、降りかゝる雫に花やたぐふらん。うしろめたなき夜半の雨かな。辨乳母集石上ふるの社を忘るれどうしろめたなき

三輪の山哉。御杖（富士谷氏）はウシロメタキの誤也といへれど、こはやはり、ウシロメタキといふ言を強めてたるにて、荒氣無　サガナシ　などの類ならんか。

油斷ゆだんは、もとユタなり。ユタンとはねるは辛螺をニシンと云が如し。ユタカ　ユタヌル　ユタ〳〵など　せまらず　大らかにして　たゆたふさまなり。万葉にいは原の清見か崎の三保の浦の寛に見ねつゝ物思ひもなし、云々これに、後世油斷の字を當て、其の字の意にて說くなどは笑ふべし。

濱木綿　ハマユフは、今俗に濱オモトといひて白き花のさくものなり。則　木綿の如し、其の莖幾重もかさなるもの故に、浦の濱ゆふ百重なす心はもたず、云々なせいへり。

あだ波　アダ浪とは濱にもあれ、岸にもあれ、打餘りて立離れ行く浪をいふべし。さるは所を失へるなれば、他しき浪の意也。万葉十一、有礒こゆ外行波の外心、とよめるも、やがてアダ浪、アダ心としるべし古今に底ひなき淵やはさわく、山川の淺き瀨にこそあだ波はたて、とあるを、素性集、六帖には、ウハ波はたて、とあるぞ正しき。淺瀨ならんからに、ウハ波といふべき義なきに非ず。こは　ウハ波の意を得ざるより、アダなる方に便よしとのみ思ひて、しか直せるものなり。

や文字　歎息のやは、きり〳〵す鳴や霜夜の云々。竹の柴に打や霰、夕月夜さすや岡べ。近江のや鏡の山。石見のや高津の山。此の類いと多し。これ皆なくても理り通りて、意に違ふことなし。只歎辭の加はれるなり。きり〳〵す鳴霜夜。夕月夜さす

閑べ。近江の鏡山。石見の高津の山。是理りに於て違なひし。後世此の意を悟らずして、文字の足らぬ所の間に合に置て、義理の聞ゑざること多し假令は、東路や行もかへるもなどいふ類也。東路にとも、東路をとも、東路へと、も云難きより、やといひて紛らかすなり。これを　まぎらしのやといふよく〳〵辨へて誤ること勿れ。

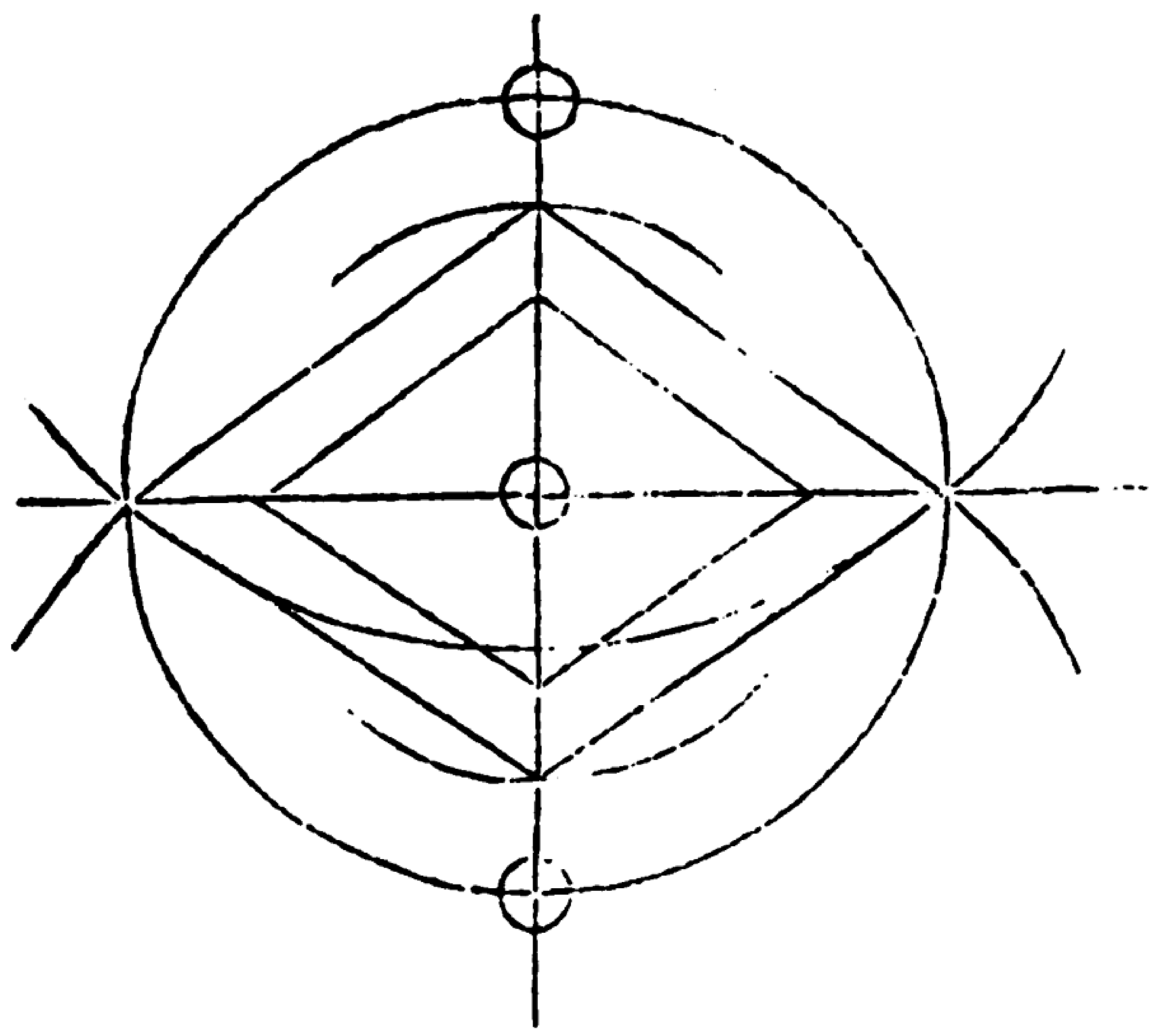
百尺竿頭進二一歩一と云ふことあり誠拙禪師の話に曰大江山の淨瑠理に、賴光岩はに腰打かけ、いかにかたがた、これより巖壁するばにて、攀登るべき道もなし。一先都に立ち歸り軍勢を催して、討取べしとの玉へば、公時傍らより進みいで、我々生所はかはるとも冥途の路に二つなし。いざさせ玉へと先立て云々、こは作者の詞なれども、此の時歸らばそれまでなり。道なき所もゆけばこそ、鬼神は遂に討取るなれ。かゝるものぞと云玉へり。又白隱禪師の曰、悟といふものは、目に見ゑると開けしとて、それにて一生をしまふ者あり。目に見えてより修行なり。修行すれば、妙處に至る。又止まれば、それ切也。幾度もさとり悟りては、又悟るものなりといひ玉へり。歌の道も亦しかり。調を會得してより、修行專要なり。さらずば、いかで天地を動かし、鬼神を泣しむる靈妙に至らん。

紋帳圖式綱目（續）

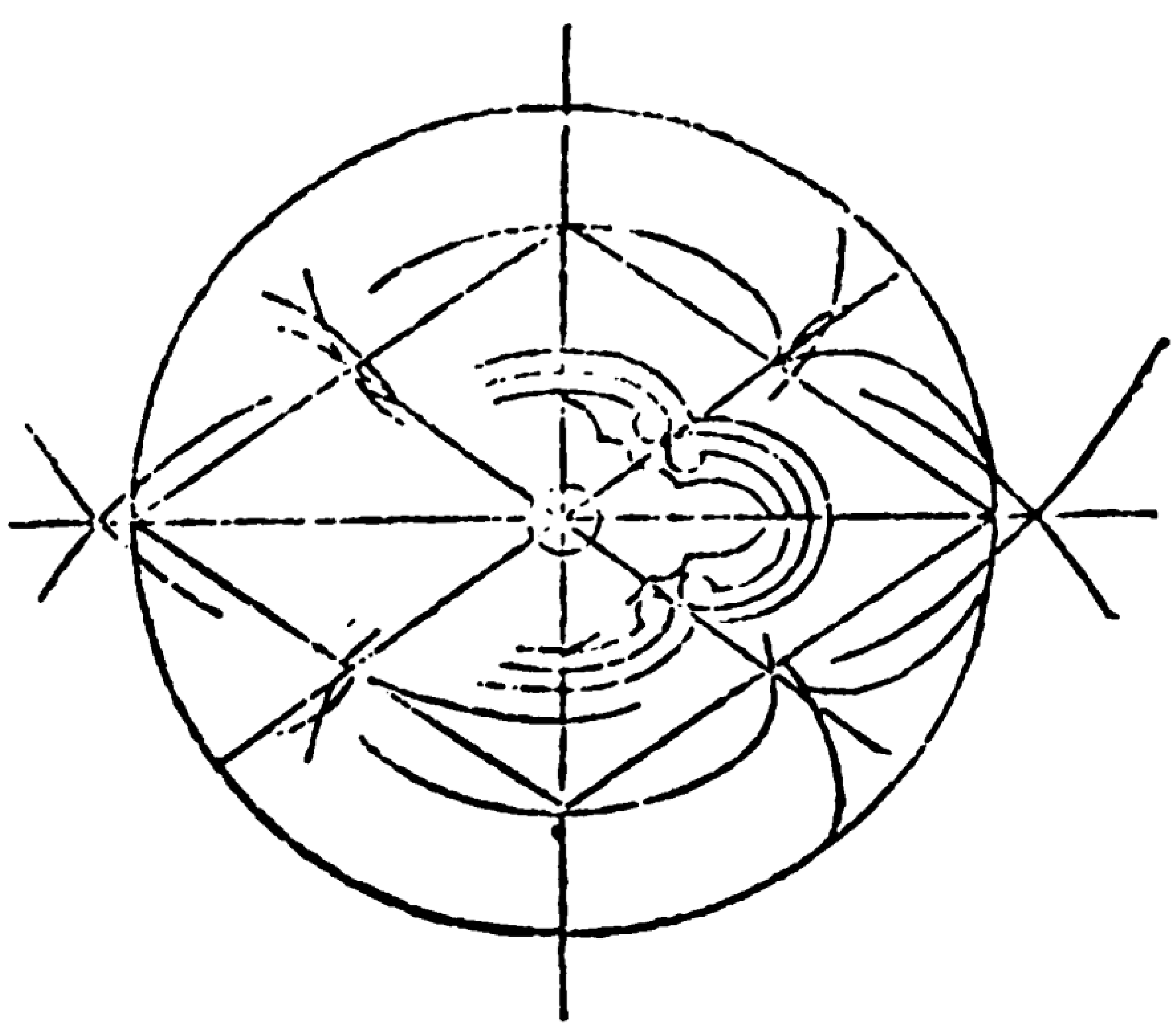
井上賴文寄贈

二つ割、五つ割、六つ割など、以上割方の力を以て凡そ左に書きあらはす紋の外、如何樣にむつかしき紋にても出來得るなり。

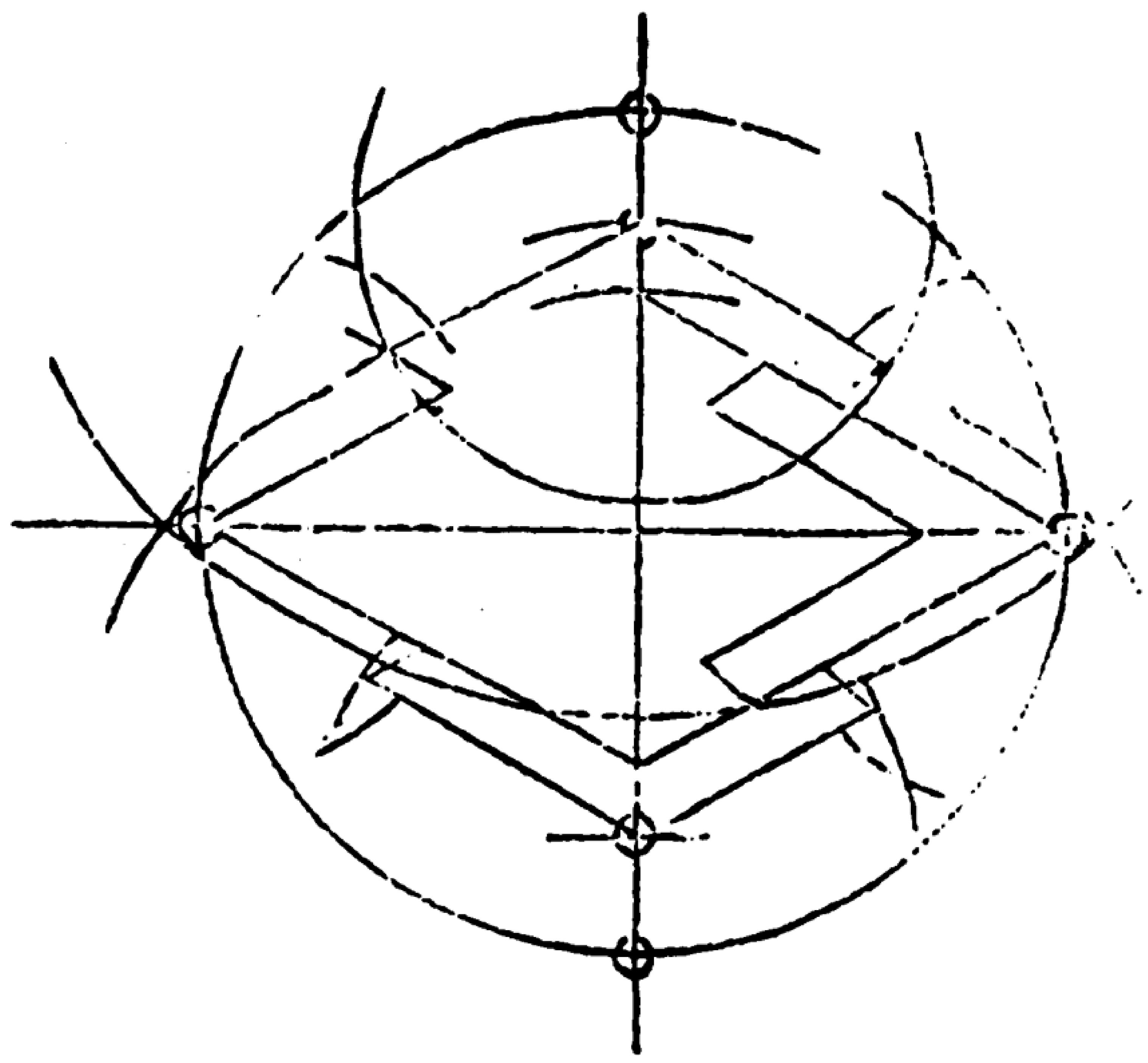
ひしの　四つ割より出づ



ひし木瓜

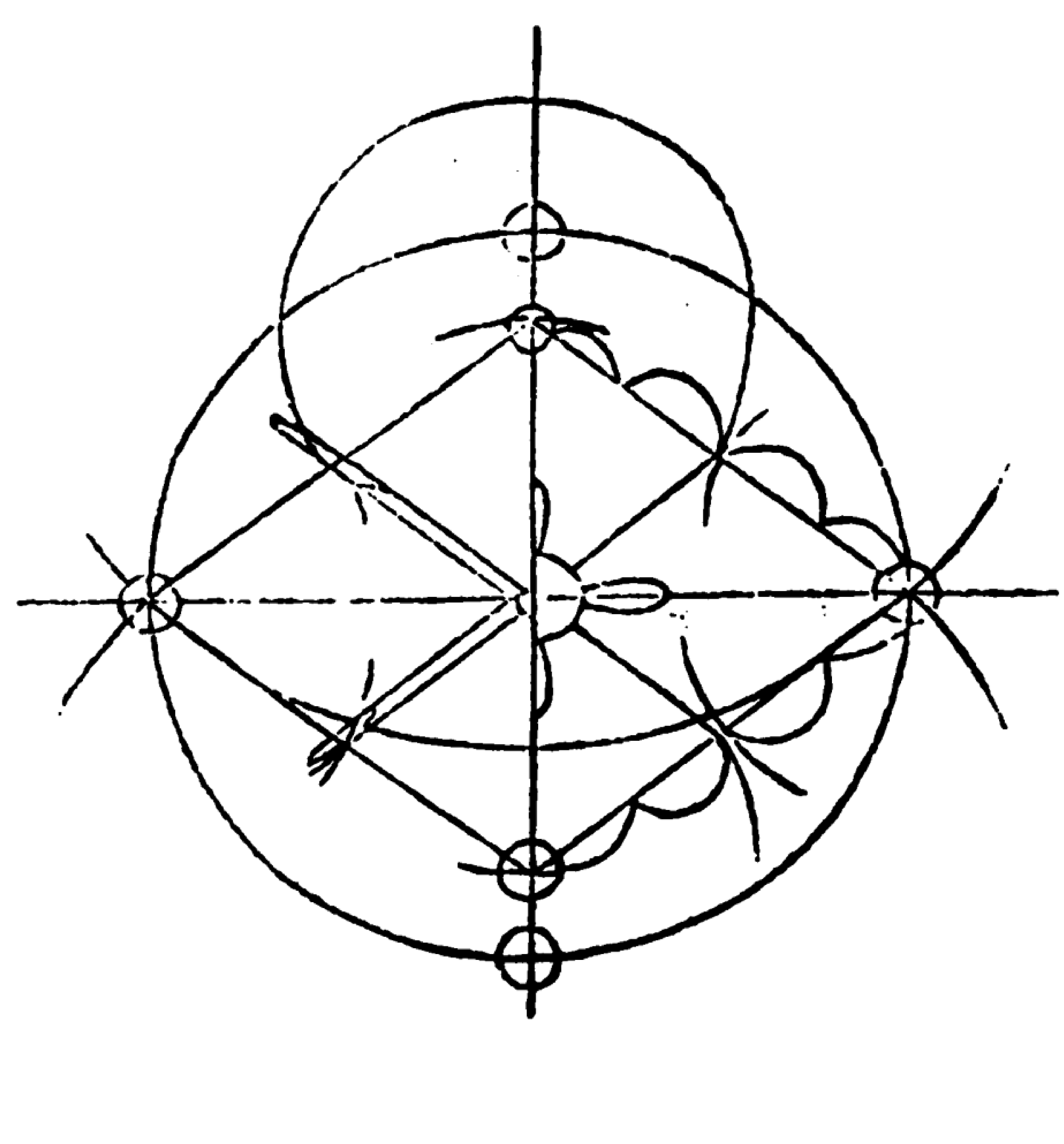


中かげ松かはびし



ひなたまつかは

四つひしの割
花ひし



武田びし

もしほ草

風當咲子

この編は、風當咲子ぬしが、昨年我が小學校を參觀されしときのさまをものされたるものなり。今こゝを示されたれど乞ひて女鑑によす。

多田總南

小學校　其の一運動場

きのふけふの春風に、梅もほころび、鶯さへ初音を泣なるけしきのどけさに、いたづらにたれこめてすぐさんもあたらしき心地すれど、やをらおりたちて、近きほとりそゞろありきす。かたらはん友もなきまゝに、たゞひとりいつこともなく、さまよふほどに、とある學校のかたへにいでぬ。門の正面にはいかめしき玄關あり。校舍は木造にて、さのみ新らしき建物にはあらねど、其の宏大なることおどろくばかりなり。內に養はるゝ生徒の數さへ、おしはかららる。門の左右にならびて、桃櫻などおのがじゞ色香をきそひ、しづかになびく青柳の糸の我をまねき顔なるもうれし。少し斜に右の方を見やれど、こゝは運動場なるべし。廣やかなるかこゐの一面に、砂利を敷つめ、四方のめぐりには、梅柳に櫻樫などとりませて、植ゑ付けられたり。ところ〳〵にまた芝生などありて、青き竹もて四方をめぐらし、中に梅松竹やうのもの清き操を表はしたり。やがてひゞきわたれる鐘の音につれて、生徒は列をなして出來りぬ。教師にゆるさるゝや、男も、女も、おもひ〳〵に、おのがあたらしき友どちと、手とりかはし、あそぶさま、いとめでたし。こゝは女子のあそぶところとおぼしく、男は七八歳の幼きが見ゆるのみ。されどそこ〳〵に見とりせる教師も、皆女のみ。或

は我が國ぶりの髪を結べるあり、はた西の國ぶりにならへるもあり、いづれも黒き袴をつけたり。其さまいかめしくりゝしくて、人をみちびくのたもかげさこそと見ゆ。男は小さきながらも、いと快活にして、あるは鬼おふ遊をなし、あるは戦のまねなどして、手まりつく女子の、そのまりたとされて、うらめしげに男の後見おくるもをかし。いづれもいとたのしげにゑみさかえつゝ、打興ぜり。かゝる樂境いづくを尋ねてか、またとあらん。此方の堤のきはに、一の木あり。横にふとやかなる枝差出でゝ、さながら機械体操をなさん料のごとし。此許に七つばかりなるをのこ子二人、あどけなきさまにものいふ。何をかいへると近よりてきくに、一人貌の色、白くて女にても見まほしげなるが、君さる事をなすは、兼て先生のとめ給へる處ならずやといふにそふりむかへる一人、うなづきて、さなり〳〵、されどかの人もなしたりしは、といふは、貌丸くて、一まわあどけなきに、小さき袴つけたり。大方此枝にて大きなる子のすなる機械体操をせんとなるべし。さるにても、かの先生のとめ給ひしものをとしきりにいさむるも、かしこにはおなじばかりなる子の、物おもはしげに立てるあり。やがてよりきたる一人、君いかにせるにか、内へかへりたきにや、お腹のいたむにかとたづぬるに、いらへもせで、たゞ頭をぞふるなる。かれはさかしげに、君用もなきにうちへかへりたがりて學校をきらへど、大きくなりてもえらい人にはなれぬなりといへど、此時口をひらきていなとよ、我は學校をきらひてうちへかへりたきにあらず、我が母上は前の日曜の日より、いたづきになやみ給ひて、弟にのまする乳いでず、乳母のをのま

せんとすれどものまで、たゞなきになきてのみあるなり。けふも家をいでしときなきてありしかど、今もなきやまでやとれもひてとかたりつゝ、はやみづから涙ぐみてありけり。もれきくおのれも、そゞろにかなしくなりぬ。むかへる友もこうじたらんさまなりしが、おもひうかへることやありけん、嬉しげに笑てひ、僕君によきこと敎へてん、わが隣の人、かつて乳いてさりし時、ちゝことといふをのませて、乳の代りとなしたりき。君それをのませ給へ。學校の伊東さんにきゝたりと、うちにかへりて母君に告げたまへ、いつにてもくすりやに買りありいざ遊ばんものと、手ひきあひて、ゆくさまいとらうたし。さても幼きにも似ず、友愛の心深きことかと感ずるにつけても、師の常々の敎へ、さこそと感せられてゆかし。かなたには、十二三ばかりなる女子六七人まどかにつどひて、物いひてはわらひどよめくに何をかするど打よるほどに、鈴の音きこゆれば、今まで入り亂れて遊べる子等、おのがどち定まれる場所にはせつどひて、見るまに列を作り、やがて敎師に從ひて内に入りぬれば四方せきせくとして聲もなしたゞ植ゑられたる立木のみぞ主人顔なるや。(未完)

三月はじめ艸

まに〳〵

金津常十郎

こは我が祖父の著せる隨といふものより拔出たるなり。

むかし、加賀の金澤のまちに、宮崎吉太夫となん呼べる人のありき、此の人、狂歌といふものに長たり

けん、或時れなし國の、竹の橋といへる驛に奉行してありけり、其の頃旱りにて、數十日の間、雨ひた降らざりけれど、人々からうじはてゝ、處々の神社寺院に、雨乞のいのりあれども、かつてしるしなかりけれど、吉大夫人に語りていひけらく、凡そ雨乞は、和歌にしくものなし、併し今日迄は、公の御普請なれど、ふらぬをよしとす、明日にならば、御用も濟みなん、さらば必ずふらずべし、とて、其の日になりしかど、

竹のはし杉のはしらをたてそへて
　すむとひとしく雨ふりにけり

かくなん短冊にしたゝめて、屋の上にのぼせ、天を拜みしに、其の夜、雷はためき、大に雨降る事、三日になるとなん。

又或時、射術の傳法する、吉田某の家にまゐられしをり、某が刀自の臨產滯るにおひしかど、

八幡の弓の冥加のある家に
　なにか不足でまかりいでぬぞ

かくなん、短冊にとゝのへて、產婦の座上に貼りしに、即時平產なりしとかや。其の比にやありけん、歌學の師、所々出入せし者ありけり。吉太夫參會の時、其の師に問、歌といふものは、いかによみ侍るものか、知り侍らず、敎へてたべと有し程に、其の歌學師のいふには、凡そ和歌は、文字の數三十一文字に、長きことをいひのべたるものなり、こゝろね給へ、と有りしに。吉太夫取あへず、かくいふ物にやとて、

はもぶらりうなぎがしりに喰ひ付きて
　まだもたらずぞ蛇もくひつけ

歌學師、これを聞きて。それはながきことぞかりに

て、曲もなし。凡そ和歌てふ物は、やすらかに、次の句は、れもさ樣に、中五文字は、やさしく、それより景物あひしらひ、下の句は、しかととむるなり、とありけれど。吉太夫とりあへず、

ひとすゝきこずゑに牛がさへづりて
　時雨まじりにかなづちぞふる

如何にやと、聞きけれど。歌學師これにもこりずして。それは歌の樣あまりわらはに侍るなり、其の趣きをふくみて、御よみさふらへ、とありしに。吉太夫

地のこぶに星の親父がいでられて
　火事の玉子はいらぬなりけり

山は月出で、灯のいらぬといふこと、自由にいひまはして、はては學歌師も、舌を卷きて、恥ぢけるとなん。

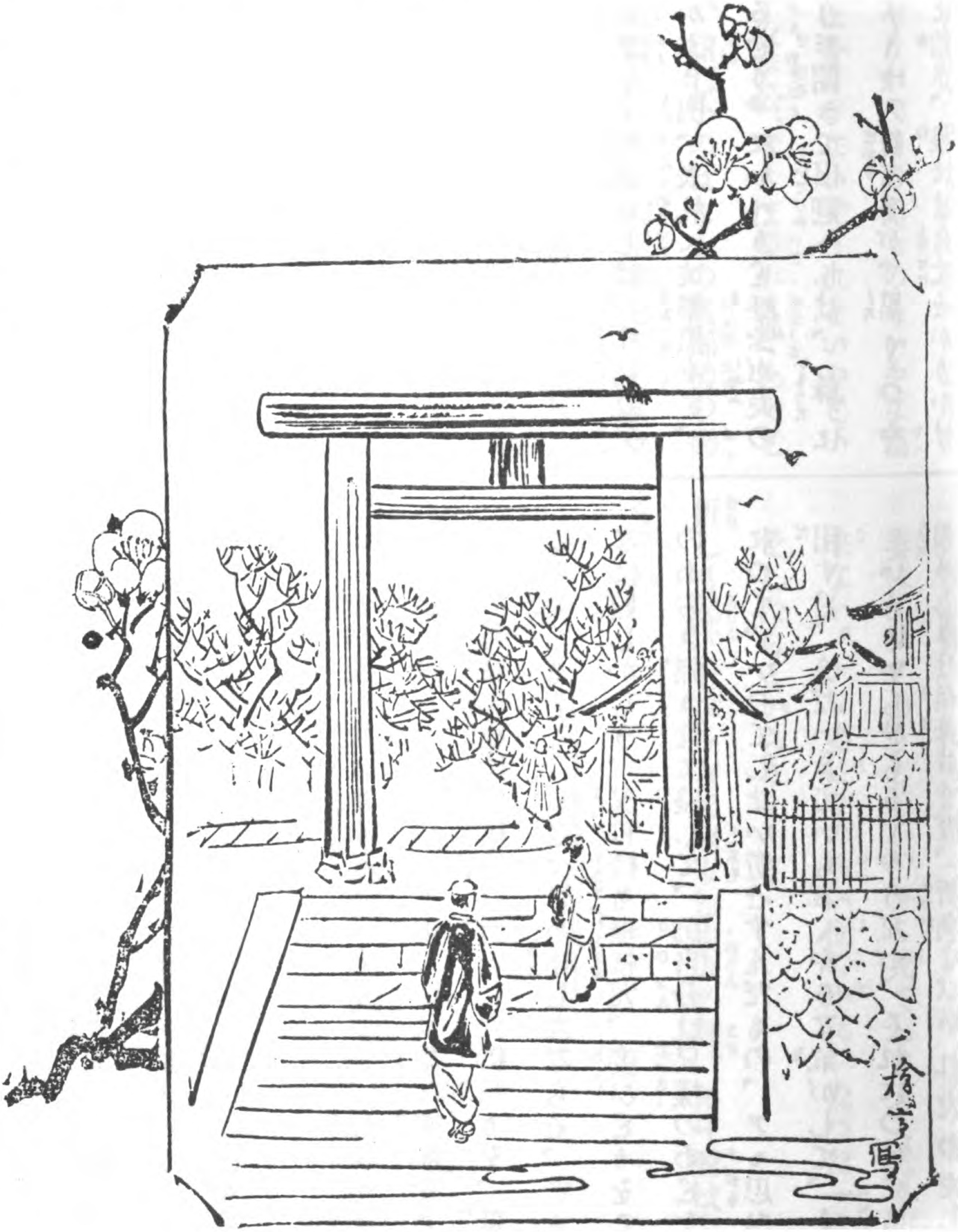
東京廿四景（十六）

蓬生の舍女史

湯島天神

東風やゝのどめる二月の都べ、梅こそ尋ねありくべきながめならめ、それは、臥龍のめづらしきより、園の曆の筆はじめなる百花園のゆかしきも、春こそ來ね川の捨てがたきも、さては、梅の名所にはあらねども、東風ぶかせど惜しみとゞめたまへる御心の名殘りも思ひそめられて、一入ゆかしくながめらるゝは、此處かしこの天滿宮の梅のけしきならめ。湯島なるは妾が家に近き所なり。白き紅き咲きまじりて、さながら雪の如く、月の如くにほふが上にも、何となう神さびてゆかしく思はるゝも尊しな。南の神垣に近く停みてうち亘せど、昔の武藏野の刈萱と立ち亂れたる都の町々家々の、淺く濃く霞にた

なびくさまもおもしろく、右の方には駿河臺、聖堂の森等のや丶遠く長く靑み亘りたるもをかしけれど、明神の森の、や丶横に茂りて高くながめらる丶に、彼方よりも、さは見ゆらんと思ふもをかし。左の方には、近く忍岡の森、不忍池の水、誰が何によりてか名づけ



別けむと思ふもをかし。境内ひろからねど、やゝ高ければ、夏は木陰の風、都の外のものならむに、雪のあした、月の夕べは今更かは。何はあれ、清く、たかく、ゆかしき御靈の御前なれば。

朝露（續）

柳子
櫻子

二人曳の車のかけ聲勇ましく引込みしは、牛込區矢來町の、とある黑きかぶき門、表札には墨黑々と、從七位松井信夫としるせり。おかへりと呼ぶ車夫の一聲に、玄關のひらき戶開きて出迎へしは、妹にやあらん、年はやう〳〵十八計なるが、黑くつや〳〵しき髮を高島田に結ひ、根には白丈もかゝりかけたるが、いと品高げに、おかへり遊ばせとうなづきたるいとうるはし。車より下りし主人は、近頃大尉を拜命せしばかりなるらん、二本の金筋未だきら〳〵しき帽子を手渡して内に入りぬ。跡には乙女只獨り

アゝ妾程世の中に不幸なるはあるまい、兄樣が生きていられたら、やつぱりあゝいふ風に軍服をめして、毎日御役所に御通ひ遊ばした御歸りを、母樣や妾とも〳〵、おなぐさめ申したならば、どんなに嬉しからう、又母樣も母樣だ、妾ひとりをこのおぢき無き世に殘して、御自分は兄樣のおとをおつて、いつてしまい遊ばすんだもの、アゝ思ひ出すと、まだいきていらるゝやうな氣がして、そこいらにいらせらるゝやうだが、それにつけても恨めしきは伯母さまだ、折角よびいれたわたし

を、よそ〳〵しうとりあつかひ、そればかりならまだしんぼうも出來やうが、あの聞くのもいやな藝者になれとは、實になさけない、それをいやといへば、無理やりに下女奉公、なんぼ妾が孤じやとて……けれども、嬉しいのはこゝの旦那樣の御やさしき、私と仝じ樣に一時に御兩親をうしなひあそばしたさうにて、思ひやりも深く、下女といへば下女だけれども、御臺所の事は、皆おのれ龜さんがしてくれゝば、妾はたゞほんの御身のまはりのことばかりにて、何とて苦しき事はなけれども、矢張り彼や是につけて、こひしく思ふは親兄弟、可愛がつて下された母樣にはしに別れ、たのみに思ひし兄樣にまで、アゝいつそのこと、あまにでもなりたい……なれど、母樣の御臨終のときの御ことばに、あゝいふこともおつしやつたし、又御遺書の中にも、はやく成人してあつぱれな妻になれとありしとか、アゝ死でしまふことも出來ない。アゝ妾はこの廣い世の中に、たつた一人どしたらよからう……

折しも廊下をひゞきて來りし主人の聲、オイ愛はをらんか

水産王

石樽青苔

秋もやゝたけて冬ちかき神並山の紅葉は、磯うつ波の上に散みだれ、岸にうちよせられぬと見れば、又沖に打いだされ、幾千度漂ふさまを見て、巖の上にいこひゐし磯野浦津男は、ともなひ來りし妹のいさ子にむかひて「あのはた〳〵と打よする白き波の上にもさやかに見えて、うつくしきあれあの紅葉を、

いかにもよきながめにはあらずや」いさ子「まことに美しきながめとは思へど、あの紅葉のはかなさ、兄上さま、もしわれが人ならむ如何なるべき、七ころび八起とやらはうき世のならひとき丶しかど、あれあの紅葉を見そなはせ、百ころび千ころびこそすれ、とても一起もかたきやうなるを、」といふが少女らしきに、滿津男はほ丶ゑみつ丶「これは又をかしきこと、さてはおもしろくはおぼさずてか」いさ子「おもしろからぬにはあらねど、あれ〳〵又もや枝を連ねし一つ樹より、うつろふ紅葉のちり〳〵に、ちりて別れて又あふこともなみの中、さても兄上はあはれとは見まさぬか、」といつになき悲しげなる詞なり。

大物浦の漁舟は、眞帆に片帆に出入るおもしろさ、波遠く天につらなりて、八重の潮路の果もなき太平洋の壯なるに、うらわかき滿津男、ことには朝な夕なこの岡の上にのぼり來て、見ても見あかぬ景色、今日もなほ立去ることのをしければ、やさしき妹が何となくうきた丶ぬを見ていとしがり、打つれだちて程ちかきわが家路にむかひぬ。

いつも散歩して歸りがけに、一號より五號までの干魚製造場に、あまたの男女が鰹魚などつくれるを一めぐり見めぐりて、まだこの職業に加はらぬ身も、わが家の世々のつとめと思へど、何くれと心をとめて、見もし聞もするがならひなれど、今日は妹を慰めむとて、ともにともに北部屋に入りて、面しろきこと、をかしき話など取あつめて、笑ひ興じゐたり。

折しも父の兄妹を召し給ふに、ともなひてゆけば、父はいと穩やかに「今東京の弟の處より文とゞきてとて片手に文かいひろげ、はやう讀終りしぞ、今一

たび繰返したまふやうなり。二人は居ならびて「何事のさふらふにか」ときけど、父は文をさしおきやをらこなたを見おこせて、かけし眼鏡をはづし、袖もてくもりを拭去りつゝ「かねて咄さう〳〵と思うてはありしが、さる折もなくて今日までのびつるに、東京より度々の文、ことに吾も思ひあたれるふしもあれど、今そなた等をよびしなり、わがいふことをよくきゝてよ」といふ、二人は何事の出來にけるぞ、これは又改まりてと畏りつゝ耳欹てぬ。

「そなた等も知れる如く、わが家はもと海よりいづるくさ〳〵の魚をつくりをさめて、清國におくり出すが世々の職にて、これより後もなほます〳〵盛ねしむるやうにするが二人の務、吾は物學びもせず又智惠もなく、たゞ祖々の御惠の露によりて、どうやらかうやら今日の姿をたもてるといふもの、いやはや昔はさるむつかしきこともいらず、魚をさへこしらへて食べるやうにすれば、それにてすみしことなれど、世の開くるに隨ひて、改良々々といひのゝしり、又追々世界の智惠の高くなるにつけては、わが身ぢから學問もなく智惠もなくてはすまぬやうになり、現に東京の弟などは、やはり我家に生れしことゝて、海の方につきし學問をして、今は水產學校の教師にまでなりし故、二人の物學のことも頻にいひくるなり、」滿津男「東京よりの文といふはその物まなびの事にて候ふにや、」父「その物學びのことゝ今一つは」いさ子「やはり兄上や私どもの事におはするか、」父「そのこと〳〵、滿津男よ、そなたは去年みまかりしをぢまことの跡と思ひ居らんが、さにはあらず、そなたはもと東京の弟の子」滿津男「さては私はあの、」いさ子「あの私もさやうに」父「いやまて、まてよ

弟の子なるが、吾には早とる年の四十このかた、金持よ仕合せ者よと人に羨まれながら、白金も黄金も珠も何かせむ、たゞ一人にても子寶をと、あらゆる神樣に理なきいのりもし、日頃はけなせる佛にも我を折りて手を合はせ、わが後の世のことは兎まれ角まれ、いかにもしてと願をかけても、よく／＼のことゝ見ゑ、遂にないものとあきらめて、弟に拜み、生れてやう／＼三才ばかりなるをもらひしがそなた。なさぬ中なれど生の親にもまさる思ひ、たゞわれ等二人の心はそなたにのみかゝりて、世の中の憂も歎もそなたを見れば忘るゝやうにればゑてはぐらむ其中に、三年ばかりを經て思ひもかけぬ妻のみごもり、月日足り滿ちて生れしがいさ子。それより後は右と左にをきすゑて、花よ紅葉とあまたの春秋をたのしみくらして、家内何となく賑はしく、その

ありし日より、とく這へよ、笑へよ、たてよ歩めよ一日も疾く大きくなりてと引のばすやうに思ふもはかならず、そなた等二人のとく成人らば、千代の契をむすばせて、わが磯野の家の礎ともなさむものと、妻もそをのみ樂しみて、今はよからむ今年の中にはなど思ひくらしてありしほどに、しれるやうに去年の秋かへらぬ旅にをもむきしが、今はとなりても口をしきは彼等二人を娶合せざりし事、殘をしきは妹脊の緣とりむすぶ式の席に數の足らぬやうになりなむことゝいひくらしてありしぞかし、さては春にもならむ一日も早くと樂しみにしてありながら、何かにかまけて又今年も秋の末となりぬ、いで今年はと弟の許にきゝにやれど、それも誠に理なれど、またさう遠くもあらねど、今の若き男女は田舎の中にのみうづくまりて世の中のことを見ねど、後々に

商せむにも、世にたゝむにも、何かに便なきこと
のみ多かるべけれど、その前に一勉強させてはと、
強ちにいふにせむかたなく、せめては滿津男には中
學校を卒へさせ、又其間にいさ子も女學校に入れて
と思ふなり。しかし中學は仙臺にあれど、女學校は
なき故、今東京には、いさ子と同年のたか子といふが
ありて、門見女學校といふにて物學びしをれど、
弟の内へあづけてとおもふ、いかに、それにて異
存はなきや、尤滿津男も仝じく東京に出て、いさ
子ともにせむとおもふか、」と問はれて、今までは
實の親と思ひ、實の妹と思ひてありしに、生の親
は他に在り、ことに妻にすべきものぞとは夢にも知
らず、今の今までともに遊びともに戯れしことの恥
かしさ、東京へゆきたけれど、育み給ひし御恩を
よそに見て、生の父母の戀しきかのやうに見ゑて、

又一つには、妹と思ひし昨日は知らず、これが我妻
となるべきものときけど、つき纏ふも面はゆく、今の
今まで手をとりあひしこともわすれて、そよ／＼し
げにわざと顔を背けて、滿津男「學校の教師のいひた
まひしには、まだ二十才にも足らぬ田舍もの、都に出
てゝは、十の八九までは業を成すものなく、大かたは
あらぬ道にふみ惑ふとこそいひ聞かせたまひしか、
されどいさ子どのをぞ東京へやり給へ、われもまけ
ぬやうにつとめはげみ中學を卒へもして、又上るべ
き折もあらば」父「それもよし、然らば近き内出立つ
ことゝすべし、第二師團につとめゐる原善介といふ
は、弟の知己なれど、ゆくことゝならばその方にた
のむつもり、何にしても勉學して、家もさかへ國も富
むやうに心がけてくれよ、」と、くどきまでいひきか
するに、いさ子も兄ならぬ兄にわかるゝもつらけれ

ど、今はいなともいはれねば「畏りぬ、」と出てゆけり。

朴平（十五）

白魚女史

淤泥の中の蓮こそ中々にすゞしけれとて、書齋に入りたる文雄、如何にしつらむ、その日よりは、獨り引きこもり居て、他出もせず。何の面白からず思ひ餘る事ある、をりをりもらす太息の、二間三間隔てたる百代の耳にもきこゆるに、その度毎に何となう命もつゞまりゆく心地す。

二月もいつか半を過ぎ行くに、母よりはまた便りあり。

文雄、文をかく事をもいとふやうに老いぼれてか、幾歳にかなりける。朴平だにまだまめに働き居らんものを。のう百代、母にもの思はせじとの汝が作り言にはあらずや。父君も誠とはなし玉はねげにて、をりをりむづかしく云ひ給ひてぞ。さても、昔は、爲よと云ひつけたる手習の間をも、いつしかぬけ出でゝ、二人たづさはりて、野邊のつゞなき、山べの木の實拾ひ、呼びかへしても、すぐには歸りも來らず、ともに、〳〵、世話をやかせしものを、その折りの心、久しきゆかり、少しは思ひかへすやう、此處此の言葉、必ず文雄に、其方よりうちつけもねせずぞ、此の文さしつけてなりと、のう百代。夢には一夜に百千度ゆきかへりてぞ母はとゞかりに、御筆を止め給へるをよむにつけ、いかばかりか思ひわび給ふ御影の、そゞろに目のあたりにもうつりて、かなし〳〵、いたはしさいふばかりなし。よし淺ましとればさぞれぽせ、げに昔よりのゆかりも、母の深き思ひをも、





一言は聞えんものをと、はやわきかへる涙を袖にせきてやをら、訪づるゝ文雄の書齋。引きあくれども、文雄は例の見もかへらぬに、はりつめし心も、また甲斐なく挫けて、言葉もえ出でず、涙のみ溢れむとすれど、そのまゝ己が部屋に引きかへして、母の文の上に泣きふして、しと〳〵なる涙、しばしは盡きず。やがてきえかへる思ひ、母様、如何に母様がわせり給ひても、もはや文雄様は、自らをくされし水の汚きうぢ虫とまでおとしはて給ひてなるを、如何に如何でかりと心を盡くし給ふとも、妾を、いかでもとのゆかしき若草の妻なぞと見給ふべき。母様、もはや思ひて給ふな、恨みても給ふな、なげきても給はるな、つたなき人の心をも、今は、妾が身を捨てゝ、必ずとまでつめたるけしきに見えたるが、されどもと又思ひかへすも道理、再び訪づれど、文雄は舌うちしてうるさしと云ひげ。見れどまた湧きかへる涙を、じつと堪へて。文雄様、國元より便りと呼びかけても、彼方はなはふりむきもせず。今年は初春のおとづれそしとて、父上までが心遣ひし給ひてと、はしたおきをやう〳〵忍びて云へども、なはそよとの答へはなく、俄に思ひつきし如く、立ち上りて、羽織きかへなぞするに、おふろへ行き給ふにやと、手ぬぐひなぞとり出すも、答へもせず、手にもとらず。御煙草ならで朴平にと強ひてなは心くでるも、彼方は固く口をむすびて、書物筆記、そこ〳〵にとりをさめて出で行く、餘りの邪險、百代も流石に送り出づる心もなく、送り出でたる朴平もたゞむら然と見送るのみ。

湯あみにや、煙草もとめにか、はた其處等そゞろありきにかと、百代はなはいつか〳〵と待つほどに、遂

にその夜は歸り來らず、さては春野樣方にてゑひふし給ひしならんと、朴平の言葉、それきくも自らを厭ひ玉ふ故ならんと思ふに、はやあらぬ心地するに、あくる日もくるゝまで歸らず、さては、梅見にてもさそはれ玉ひしかと、朴平の云はるゝに、さやうに遠く行かせ給ふと知らで、御召衣もかへんやう申上げしものを。れろかや我が言葉きかれもせぬにと、思ひ沈める孤燈のかげ、母のおもかげの心にうつり、日來、ともすれど、なやみ給ふれん頭の病ひうつとうしげに額をもみ給ふ影さへ、目の前にうかび見ゑて、堪へがたく、またもよゝとぞかり、かきくらす夜半の涙、人は何處の花かげに、いかなる雫に濡るゝらむ。

さても〳〵、不孝の子や、年來、日來、ものは思はせ奉るまじと、心にのみ思ふぞかりにて、つゆ御心を休めもまゐらせず、さても不孝の子、いつも心づけて心をいためまつらぬやうにと、したゝむる我が文、なほ何處にかよどみの見ゑてにやと云ひながら、文机にさしより、

母樣にもの思はせじとの妾が作言との御疑ひ、されぼし給ふも、げに道理りとればゆるまでの文雄がなはざり、申しわけも侍らねど、誠に左樣のことには侍らず。誠に〳〵文にのみなほればれ居り侍りて、さのみは、自らをも省み給はねど、伯母樣のれはせしよりのゆかりと思ひて、私の、心強う立ちまひ候ふしには爭ひも遊ばさず、れろぞの御用のみは、よろこびてさせ給ひぬ。案じ過ぐし給ふとも知らず、妾も、いつしかそれを見習ひ候てか、此の頃は何となう筆とるものうく、千代が都めづらしうして、樣子などとひこせしにも、はか〴〵しきかへりもせぬ

此の頃のものうさ。誠に都はよき處、早う大きうならで、自らの如く、都にかしづかせてやらせ給へ、次郎をも、一日も早うゐて上り給はんやう、先は御わびをかりにとしたゝめ終り、封じて、夜にもなりたれど、朴平をたのまんものと思ひて、その部屋におとなふに、朴平は居らず、何處にかと呼べど、いかにしけむ答ふる聲なし。さては町へでも用にや行きつる。告げでは出でし事なきをと、思ひいぶかりつゝ、暫くまちたれど歸りも來らず。今宵に限り告げもやらで、朴平。

よく書を見る人は、　一句を見ても、　其の理を得て用ふれば、　用をなして益あり。

よく書を讀まざる人は、千萬卷のふみをよんでも、其のよきことを取用ふることをしらず、益なし。

たとへば　石をわりて玉をとる人あり。　是、よく玉を知ればなり。

寶の山に入りても、手を空しく歸る人あり。是玉を知らざればなり。

書を見る人、　益あると益なきとも、　亦、　かくのごとし。

（益軒文訓）

諒闇につきて思ひつゞけ奉る
ことゞも　　石榑千亦

あはれ、たゞかりそめの風の御こゝちとうけたまはりてだに、とく平らかにならせ給へといのり奉るを、ましてこたびの御こと、四千萬の民草は、いかでたゞにやはあるべき。八百萬代の後までも榮えさせ給へと、天神地祇に、仰ぎてはいのり、俯してはのみ申しゝものを、そのかひもしるしもまさで、兩陛下は御病の大御身をもいとはせ給はず、御いでましありて、いかでと祈り給へるをも、やんごとなき人たちの、み枕邊に、みあとべに、なげきかなしみ奉るをも、わかき折より仕へ奉れりしあまたの女官等が、こひねたひ奉れるをも、よきくすしのあらむ限、よき藥のあらむ限、手に手をつくし奉れるをも、かへりみ給はで、月の十一日の夕日のくだちに、大御母陛下は、かしこくも、青山の宮に神あがりまし〳〵ぬ。天下の悲歎は、ことばも筆も及ばずかし。

昨日ころ、うれしくたのしき年を迎へしか、昨日まで千代の門松いかに綠なりしぞ、老もくみてし若水、幾世ながかれといのりししめ縄、あはれ今日はうれたくかなしく、忘るべからぬ年とはなりぬ、門松、若水、しめ縄、いづれ千代にして、いづれ八千代なる。三十日が間は、國中喪といふことを仰出させ給ふ、歌舞音曲、すべて娛樂といふ際のものはあとたえたり。忠良なるわが臣民の、さ仰出させ給はずとも、さてもかの緣日といふものをよすがに過ぐる、末が末の興行者などは、今日明日とその日の食ふ料得て、わづかに其の日をおくるきはなるものさへつゝしみにつゝしみて、わが餓うるを忘れ、みるのごとくわね

け下れる衣をまとへる、下が下の勞動者などまで、喪の章の黑ききれを肩にむすびつけたる、なつかしともあはれなり。

さるにてもわが邦、武家の世となりてより、雲井の庭の禮典、漸く本のまゝならず、廢れはてゝ、古のれもかげをとゞめざりしこと七百余載、中今の大御代となりて、はじめて はつ國しらしゝ天皇の御世の昔にぞかへりにたる。さてはこたびの事、今よりゆくさき、世々の御典例ともなることなれど、そのことあづかれる人たちは、よく古を鑑み、今をはかりて、萬代の後にも傳へむ本を開くべきものにこそ。それにつけても、かの旗の上に黑き布片つくることは、誠にはじめての道をひらけるものにして、此上なきものならむ、さても喪の中に用ゐるもののみな、黑き色を用ゐるは、西洋の風にや、はた佛者のならひにや、われはなほ古風に、なべて白き色ならむいかにとぞおもふ。そは純にして、まじりなきは、いとふさはしかるべく思はるればなり。さらでは、ことにかゝづらへる人たちをのぞき、あるが中の多くは、みな西洋風の衣服よそひて、大かたは彼の國の風みたらむが如く、いとあかぬ心地せらるればなり。禮典はその國々の特色をあらはすべきものなるに。

さてもかの日より、日にけに空かきくもり、雪みぞれ霰とふりつゞくは、天もはれぬ思ひにやしめるらむ、地震地鳴などしきりにおこるは、地も靜かにやあられざるらむ、さるにても今年の雪よ、近比めづらしく降り積りて一尺あまりにもなり、千代の松が枝折れて飛び、八千代のくれ竹くだけてふしぬるが多き、草木もやゝ心あるに似たり。先帝の大御葬の折にも、雪ふりつゞきくに、いかにふかきゆかりに

ましますらむ、まして同月、ことに今年は三十年にわたりますときくをや。又ことに神あがりましけむ日と、かの大御病にかゝらせ給ひけむ日と、同日ときゝ奉るも、まことにはなれまさぬ御縁にましますらむ。

先帝の御宇には、いまだ四方の海波穏かならず、大御心をなやめ給ひつゝましけむを、こたびは維新の大業とゝのひ、内國の政治はいたく進みて、塵ばかりのひまもなく、新しき土地さへわが版圖に入りて、又昔の姿にあらず、こを見給ひし御こと、いかばかりうれしとおぼしめさんとかしこくもおしはかり奉る。さては二むしら幽世にあひまさむ折、今の世のさまをかたらひ給はゞ、初よりの大御心にもかなひて、いかにうれしとやおぼしめさむ、いかにめぐしとや護りまさむなど、悲しき中にも思ひつゞけらる。

折しも傳ふるものあり、大御陵は東山後月輪御陵の程遠からぬ東北の地と定まれりと。(一月廿日稿)

いかにせん
くもかくれ行く
月かげを
ひきとむるべき
すべのなければ



文林

早春柳　徳大寺實則

日ざかりは氷とけゆくいけみづに
うつるやなぎもみどりそひ鳬

早春海　東久世通禧

ときしらぬ靑海原もあらたまる
春のひかりはまづ見えにけり

春夜雨　高崎正風

春寒みかきおこしつるうづみ火も
こよひの雨に消えむとすらん

春雪　津輕承昭

あわ雪は枝にたまらで落ちにけり

まさしきうめの花をのこして

春鶯呼客　前田利鬯

おのづからわるし顔にも見ゆる哉
來るひとさそふ宿のうぐひす

羈旅霞　水野忠敬

はからずも日數かさねし旅ねかな
春のかすみのたちかへるまで

故鄉柳　本多忠貫

故さとの庭のやなぎもうちなびき
ひとまちかほに見ゆる春かな

巴女　宮地嚴夫

木曾山に生ひしひめゆり色香にも
にぬたけき名を世に留めけり

森鶯　小出粲

こがらしの音のみきゝし岡越の
森のしたみちうぐひすのなく

橋邊柳　鎌田正夫

年をへしやなぎのかげに新らしく
かけたる橋の見えわたるかな

初春月　諏訪忠

かすむかと見しは雪げの空にして
すめるもさむき春の夜の月

野經夕霞　藤井行麿

木がらしのしぶくも寒しゆふ月夜
わられにかつく野路のろで笠

故郷梅　三輪義方

古のみやびしられてこゝかしこ
梅ぞのたはしふるきみやこは

松雪　松本操

ふりつもる雪にも松はいろかへず
人にまされるみさをありけり

敦盛の像を見て　安齋鶴敬

散る時に散らずも誰か千代かけて
花のこゝろをあはれとや見ん

早春雪　鍋島榮子

春立つと聞くより野邊に來て見れど
わか菜は萌えで雪ぞつもれる

江上霞　蜂須賀隨子

わつ氷はやとけそめてながれ江の
水にうかぶはかすみなりけり

海邊霞　下田歌子

汐あみし岩間やいつこれはいその
　みきはもわかず霞こめたる

古柳　小池道子

我がかとのついゐのもとの古やなき
　くちても春をわすれざりけり

梅低　松平健子

おしなべて梅のさかりに成ぬらん
　風のかをらぬさとなかりけり

梅遠薫　南郷柳子

ほのぼのと霞のまよりかをるなり
　遠やまもとのうめさきぬらし

岡梅　三宅龍子

打ちわたす岡への梅やさきにけん
　くるまつらねて人のゆく見ゆ

梅欲散　原田蒼生子

青柳のいともみだれぬはるかせに
　もろくも梅のちらんとすらん

松殘雪　鶴久子

雪きえぬやま松か枝をみやこびと
　うめのさかりときてや見る覽

老木梅　服部磯子

若木にもおくれじものとはな園の
　おいきのうめもとく匂ふらん

竹裡鶯　諏訪晴子

我が宿の庭のたけむらふしなれて
　今年もきなくうぐひすのこゑ

ある人のもとより「七重八重雪の花さく三越路に歌の光をそふる君かな」「しら雲の八重山いかにふかくとも君よ一重にわれを忘るな」と言ひおこせたるかへし

師岡須賀子

三こし路の雪に我身はうつもれて
　言葉のはなはさかむともせす

しら雲の八重山いかにふかくとも
　ひとへに君をわれはわすれむ　　柴田靜榮子

寒梅
年さへも春にさきたつみよなれは
　ゆきのうちより梅のさくらん　　清水靜子

池氷作鏡
むすびたる池のこほりは松か枝の
　千年をうつすかゞみなりけり　　清水喜久子

浦千鳥
あまがやく鹽の烟も消はてゝ
　浦波とほく千鳥なくなり

梅の花をみてよめる長歌

酒井喜雄

わかやとの、そのふの梅は、こけむせる、老木なれとも、枝ごとに、花はさきたり、花ことに、かをりみちたり、その枝を、をりてかさして、その花を、とりてしぬひて、あさなさな、このしたかけを、ふみならし、見れともみれと、あくことそなき。

雨中鶯をきゝて

また

花さかぬときはの山のやまびとに、春をしらするも
この鳥。
暦日なく時計なき里にも、都にいづる初音もらすも
この鳥。
野邊ちかく家居せる人を、朝な〳〵よろこばするも
この鳥。
氷だにとまらぬ春の谷風に、まだ打ちとけぬ聲だにも、あら玉の年たちかへる朝よりぞまたれぬる、まして花の香かくはしきにつけては、風のたよりにたぐへまほしくさへぞれもはるゝ。

春のいたらぬやどにも、こぼれる涙うちとけて、花とや見るらむ。しら雪のかゝれる枝にうたひ、春雨のよにふる甲斐もなき身にも、まづさくやどの若木の梅の初花に、香をなつかしみわたりそめ、上毛はしらずよしやふりしむる雨にも、しをるる聲には誘はれいでゝ、花の下にぞ來らるゝ。

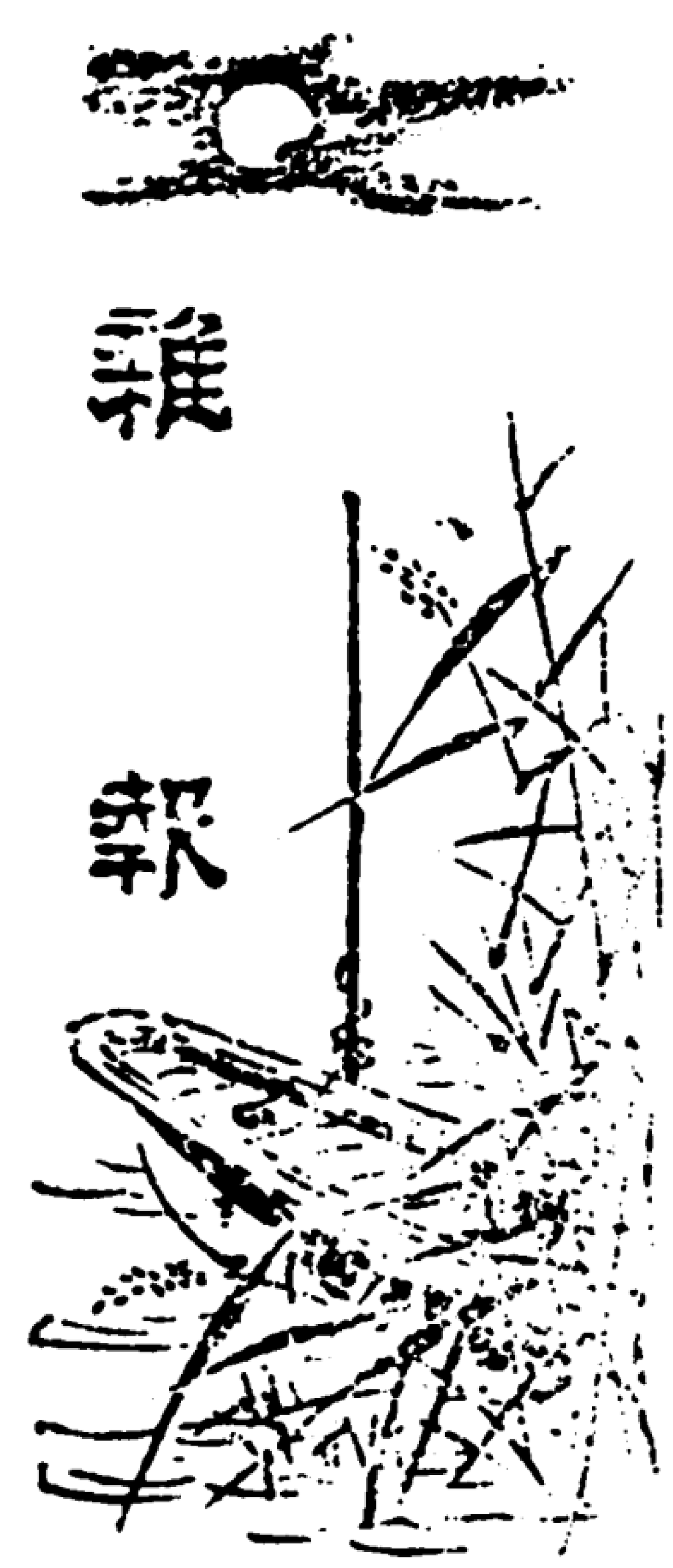
木傳ふ風にちる花を、わびしからむと思ふもれかしく、誰に負ふせてと恨むかと思ふもれもしろく、竹の雫をはるさめ〳〵となく涙と見るも樂しからずやは。よをこめてきかむとれもへぞ、竹植ゑしも嬉しき根ざしなりけり。

水の面にあやれる春雨に、糸のみどりの色まさる、青柳の下にたち、遂には梅の花笠をたのみて、野山にさへまじりなむ心地にもなりぬるは、いかに物狂しきとや見む。

さるにても去年の古巣をたちいでゝ、去年の古聲かへらねど、去年にはしらぬ雛打ちつれての百囀に、去年の秋なむ生れつるに、日比は露にだにあてじと思ふわがみどり子かい抱きて、しのぶに傳ふ軒の玉水にぬれつゝも、たちいでたるは、この初聲、かの親鳥ならではねしらぬ思ひにくらべて、一しほうれしたのしときとかむこともこそとて。

正誤

女鑑第百二十五號文林栗田靜榮子の歌「花のいろのうつろひやすき人の世の」はなの誤植



大御葬を送り奉る

畏こき

英照皇太后の御靈柩は、いよ〳〵本月二日に青山の御所を出御まし、京都なる大宮の御所に渡御らせられ、四日ばかりを經給ひて、去る七日といふに、そこを出でまし、後月輪東北陵にことしへに安く鎭まりまして、天つ日嗣の限りなき豐秋津洲の御榮を護らせ給ふ。

此の日の御齋の御樣を、遙にしのび奉れど、悲さの今更に新まりて、何れの時か忘れ奉るべき。

御埋棺當日（本月七日）大宮御所には、午前より齋主齋官を初め、大喪使事務官等皆參着ありて、御殿を裝飾し奉れり、軈て、午後二時、裝飾終りて、兩陛下御名代、幷に東宮殿下御名代參着せらるゝや、齋主、齋官、及び　御喪主殿下以下事務官等、式の如く着席、次で奏樂の起ると共に、御饌を擧げて神饌を供へ、齋主祭詞を奏し、次で　兩陛下　並に東宮殿下　内親王殿下の各御代拜あり、次で　御喪主及び　各親王並に妃殿下、各女官以下事務官等順次御拜を終り、神饌を撤して式全く終り、午後五

時、御靈柩を御牛車に移し奉る。
御靈前祭終りて後、有栖川御喪主宮殿下を始め、各皇族殿下、及び大勳位伊藤侯爵、在洛五大臣、樞密院顧問官、其他齋主齋官等の參列供奉員は、各指定の休憩所にて　御發柩を待ち奉る。
午後五時、一番擊柝にて支度用意をなし。五時二十分、二番擊柝にて供奉員整列し。六時、三番擊柝にて愈々御出門　御行列粛々として　御順路を泉山へと成らせらる。
御先導は、警部二列にて十名、其中央に川上京都府警部長、何れも騎馬正裝し、次て儀仗兵、同じく軍樂隊、次に黒木師團長、其他一二旅團長代理、海軍儀仗兵、及指揮官等孰れも正裝にて先驅す。
御本列の直先は、大眞榊にして、次に白錦旗二十旒、次に御神饌櫃、孰れも松明を捧持して先導す、次は坂本、畑田の二諸陵屬　左右に從ひ、少しく隔りて矢野諸陵頭黒色の衣冠正しく徒歩し、次て松明、御神饌櫃、齋官補二人、松明、御幣物櫃、齋官補二人、順次に從ひ、次に齋官補二人次に隊司、二條以下の齋官並び列なれり（久我齋主は老体の故を以て特に供奉を免ぜられ、馬車にて御齋場に先着わりたり）
次は御車の前驅にして、一列の伶人道樂を奏して進み、次で松明十六把二列となり、次に榊五對、又松明わりて、三好、田中の兩　皇太后宮屬左右に續き、後より高辻皇太后宮亮は袍を着し其の上に表服を加へ奴袴を穿ちて中央に進み、次て又松明わりて、山崎、松室の兩　皇太后宮屬左右に並び、杉皇太后宮太夫は、高辻全亮と全じ裝束にて中央に進む。
次は、則ち　御車なり。　御車は申すも恐れれはかれど、總て御豫定の如く、黒漆網代にして、左右

に一ヶ所宛の御鏡所あり、高さ七尺長さ一丈餘車輪の高さは殆んど御脇に供奉せる人の高さと全じ樣なりしと。あはれ　御靈は此の御車の內にましますなれ。あな、悲しきかも。

四頭の御曳牛は、先づ黑牛二頭を先として、飴牛其の次に先曳を勤め、蓮華斑は轅の內に在りて頸木を懸けて曳き奉る。徐々と御車の軋る音あはれに、悲しさいや增さりけりとなん。

各御曳牛は、頸玉より尻掛に至るまで、總て白色の飾をなし、鞍及び草履の緒は晒木綿にて包み、曳綱も又白く包まれたり。先には御牛助のもの左右に各十五人黑狩衣を着し松明を捧げて先導し、御曳牛には鈍色雜色牛飼長八人各檜の鞭を持て附き添ひ、御牛車の左右には正裝の近衛將校九人宛　御車際に祇候の華族八人衣冠正しく肅として供奉し、次に御車職、次に棧持、次に掛杖持、次に雨皮持之につゞく。

次は　御喪主なる　有栖川威仁親王殿下にして、闕腋の袍を着け、奴袴を召し其の上に又表服を加へられ竹杖に倚り藁沓を召てし從はせ給ふ、其のさまいとゞ御愁傷に拜し奉れりと。

夫より　小松若宮、山階宮、閑院宮、華頂宮、久邇宮等各皇族殿下何れも陸海軍の御正裝にて、又田中大喪使次官心得以下各事務官何れも大禮服にて供奉し、大勳位伊藤侯を始め、各大臣、其他親任官等の供奉員又正裝にて二列に分行し、次で儀仗諸兵、指揮官、佐久間中部都督及び第四師團各隊の儀仗兵、海軍儀仗兵等、隊伍肅々是に從ひ供奉し奉れり。

御列の御出門と共に、伶人は道樂を奏し、陸海軍軍樂隊は『哀の極』を奏し奉れり。

御列の長さは凡そ二十町に亘り、全く御出門濟とな

りし時は午後六時二十分なりしと承る。
御道筋は、御豫定の如く、大宮御所より堺町御門を出で、堺町通東へ三條通南へ寺町通東へ五條橋を渡り、南へ伏見街道東へ徐々粛々として　月輪　御陵所へ成らせられたり。
御行列の際　警備兵は、御道筋の廣場に整列、御所廣場には、各團体、學校生徒等整正列拜觀し、其の他沿道の拜觀者夥しかりしが、御車御道過の際は、皆悄然として敬禮し奉れり。
かくて　御車は、午後八時五十五分　夢の浮橋に着御あらせられ、豫て御設けの　御車假舍にて、御靈柩を御輦に移し奉り、休憩五分ばかりにして、御輿丁七十人にて御輦を舁き、御列前の如し。
十時十五分泉山御齋場に着御あらさせ給ふや、御先着の各皇妃殿下を始め奉り、各女官、各有爵者、及び貴衆兩院議員等は、一同整列奉迎して、　御輦を御齋場の中央に奉安す。
此より先き、　天皇陛下御名代小松宮殿下は、御靈前祭を終りて直ちに御齋場に御先着あり。
午前十時四十分頃に至りて　御名代小松宮殿下を始めとして、各皇族殿下、朝鮮奉弔大使、以下順次着席定りて、奏樂起り、各齋官御神饌、御幣物を御靈前に供す、終りて、久我齋主　御靈前に進みて　祭詞を奏し、鷹司齋官誄を白し上げ奉る。
此に於いて　天皇陛下御名代小松宮殿下　御靈前に進ませられ、御拜御玉串を奉り給ふ、次て　皇后陛下御名代小松宮妃殿下、　皇太子殿下御名代川東宮太夫、仝じく、　御拜御玉串を奉らる、夫より、各内親王殿下御代拜、有栖川御喪主親王殿下、各親王及同妃、殿下、順次　御拜御玉串を奉らる、

次に朝鮮奉弔大使李夏榮氏の拜禮あり、次は女官の方々にして、萬里小路幸子、錦織隆子、吉見光子、萬里小路智子、鴨脚八十子、梨本房榮子、平松好子、吉田瀧子、竹屋津根子、富田算子の人々は、何も數十年間　間近く侍づきて、朝な夕なに　御なさけにあづかりたることなれば、拜禮し奉るも、涙の種にて、何れもみな泣きふさがりたるさまは、他の見る目も覺えず涙を催しけりとぞ。實にさもありぬべき事なりかし。

次で杉皇太后宮大夫、高辻皇太后宮亮、次で大喪使次官以下供奉及參列員、大勳位、各大臣、樞密院議長、大臣禮遇親任官、同待遇公爵、從一位勳一等、一等官、侯爵、二等官、勅任官待遇、同夫人、神佛各宗派管長、奏任官以下順次御拜ありて、式全く畢りしは、午后十二時三十分なり

○御齋場祭詞竝誄　泉山御齋場にて、久我齋主の奏せられし祭詞、及臨時司齋官の申し上げ奉りし誄は左の如し。

祭詞

挂卷母恐伎
英照皇太后乃大前爾齋主從一位勳一等久我建通恐美恐美母白佐久今御柩乎此齋場爾坐世奉利御幣帛奉利御食御酒魚菜種々乃物乎置足波止百官人臣僚等乎始米且衆庶愼美敬比御葬儀仕奉利御柩乎瘞米奉良牟止須阿波禮此月輪乃山爾婆先乃
天皇乃御陵母御坐世禮婆御後母安久都久久彌遠長爾鎭爾坐止恐美恐美母白須

明治三十年二月七日

誄

挂卷母恐伎

英照皇太后尊乃大御柩乎此月輪乃山乃岩根深久廣久藏米奉良牟止爲弖臣正三位勳六等公爵藤原朝臣熙通恐伎英照皇太后尊乃現世爾大坐志々大御蹟乎言擧奉利誄白須事乎是乃齋庭爾相集倍留百官人臣僚等乎始米弖衆庶聞食世

英照皇太后尊波天保四年十二月十四日爾生出給比御父波准三宮從一位前左大臣九條尚忠公第六乃御女爾志弖御母波正二位前大納言唐橋在熙卿乃女奈利御諱乎夙子止稱倍奉利嘉永元年十二月十五日大內爾參內利給比明治元年三月十八日　皇太后止尊美稱倍奉利給布同五年三月京都乎行啓弖四月爾東京奈留赤坂乃離宮爾坐萬志同七年一月靑山乃新宮爾徙利給比明治十年止同二十年乃一月爾波外乃天皇乃御陵乃御式年乃御祭爾御陵乎拜加美給倍利今年母行啓弖御陵乎拜加美給波牟止爲弖其御設母有氣留乎假初乃御病波頓爾重良世給比御年六十五止白須一月乃十一日乎限利爾弖遂爾崩御利坐志志波悔志久慨多伎極美爾奈母加久弖同月乃三十日爾

皇太后尊乎崇米尊美

英照皇太太尊止稱倍奉利給布阿波禮

英照皇太后尊波也大御性質端正志久儉素萬也加爾坐萬志弖御慈愛深久豫弖女工乃事爾御心乎留米給布中爾母養蠶塲乎御苑乃內爾興志給比尊伎大御身奈賀良御親加良伊曾志美給比御許人等爾母其業乎奬米勵萬志米給比志波白須母恐伎事爾古曾故天下乃衆庶波畏氣禮止母國乃御母止仰伎奉利來志乎止悲志伎閒爾加伎久良須心乎抑沈米都々誄白須臣正三位勳六等公爵藤原朝臣熙通

明治三十年二月七日

八日午前二時御輦は再び御齋場を出御ましくて御陵へ移御あらせ給ふ、大勳位、各大臣以下の供奉員及參列者は、御齋式畢ると共に退散したるを以て、御行列は稍簡約のものとなれり。道樂なく、奏樂なく、寂として又人聲なく、たゞ深夜の寒風身を刺せりと。

御齋場を出御ましてより三十分にして　御陵に着御あらせられ、御輦を御須屋前に奉安し、更に御靈柩を出し奉りて、御寶壙の中に轆轤を以て徐に下し奉りたり。此間大喪主宮殿下は正面に。四隅には女官侍立し、杉皇太后宮大夫、高辻皇太后亮、矢野諸陵頭、堤内匠頭、齋藤、井上其他の大喪使事務官等は殿下の御後邊に侍立せしが、轆轤の軋る音あはれにして、一同泣涕したりとぞ。

かくて　御靈柩の全く御寶壙に藏るや、警蹕の聲起りて、大喪主殿下恭やしく御埋葬の詞を奏させ給ふ。實に三時三十分なり。

御寶壙には箱ありて、御靈柩はこの裡に納まりたるが、其の周圍は生石灰一升づゝを入れたる木綿嚢をもて　隙間なく詰め　御靈柩の上には、五色の絹かけたる大眞榊の御鏡と御劍とを安置し、其上には、杉の厚板四枚を並べて蓋とし、チャンを流して膠封す、其の外側は熊野炭もて隙間なく密閉せり、夫より更に、長さ一丈、厚さ一尺五寸、幅二尺五寸餘の華崗石五枚を以て組立たる石槨にて蔽ひ奉つり、セメント一、川砂利三、豆砂利三、の割合にて十六箇所に於て煉り上げたるコンクリートを以て詰め固めたる此深さ十八尺、四方十三尺なりと承はる。是より復た北城石と稱ふる青石の、長さ四尺厚さ八寸、幅二尺三寸なるもの二枚を重ねてコンクリートの上、

に盈く、此の一枚には「後月輪東北陵」一枚には「英照皇太后」と、大喪主殿下の御諱書遊ばされたるを彫りたるものにて、文字は内部に向けたりとぞ。此の北城石より上部を地盤と平均するまで、コンクリートにて詰め、夫より三尺が程堆高く山土を盛上げ、よく敲き均らすなりとぞ。

大喪主殿下には、御靈柩の寶壙に納まりたるをみそなはして、そゞろに涙を浮ばせられながら御休所に入らせ給ふ。側に侍べりし女官達をはじめ、杉大夫、高辻亮、其の他の面々も、皆聲を忍びて歔欷せぬものはなかりしとぞ。

かくて御陵の工も略竣りたれば、一同御休所に退かれたり。この時九時四十五分とぞ承はる。

程なく又諸員の着席を促がし、神饌三臺を供し、大喪主殿下御拜あらせらる。此時　小松彰仁親王、伏見貞愛親王、閑院載仁親王、小松依仁親王、山階菊麿王、久邇邦憲王の六殿下、御參拜畢つて女官をはじめ諸員拜禮す。時に午前十一時五十五分。こゝに全く御埋葬の御式を滯りなく濟ませられたり、各皇族は即事、喪主殿下は十二時十分、女官は仝二十分、孰れも馬車にて泉山を出でさせられたり。

○御埋棺御翌日御陵祭及御陵御三十日祭　去る九日午前九時より後月輪東北陵に於て、御埋棺御翌日御陵祭、及御三十日祭を執行せられたり。仝日は青山　御靈殿に於ても仝し御祭を執行せらる。

○御四十日祭　本月十九日は御四十日に當らせらるゝを以て御陵前及御靈前の祭をとり行はせられたり。

○御祭典の御日取今後　英照皇太后陛下御祭典の御

日取は左の如くなるべしと承る

三月　一日　　御五十日祭
四月　廿日　　御百日祭
三十一年一月十一日　御一年祭

●京都市へ下賜金　京都市民は、今回の大喪に付盡力したりとの廉を以て、特に金一萬五千圓下賜せられたり。

●華族高齢者へ恩賜　從一位近衛忠熙(九十歳)正二位子爵長谷信篤(八十歳)從二位侯爵四條隆謌、從二位伯爵副島種臣、從二位子爵慈光寺有仲、正三位子爵町尻量衡、正三位子爵河田景與、從四位男爵若王子遠文、(以上七十歳)の諸公卿に、御思召を以て、御紋付御盃及御絹酒肴料等を下賜せられたり。

●御救恤　天皇皇后兩陛下には、大坂商船株式會社汽船三光丸の、本月四日伊豫國風早郡難波村沖合に於て沈沒し、乘組人六十三名溺死の趣憫然に思召され、御救恤として金三百圓を下賜ひたり。

●おなじく　皇后陛下は、寒氣の砌慈惠病院患者の狀況を聞召してあはれと思召され、反物其他を賜はりしよしは、前號に揭げたるが、尙、日本赤十字社病院、醫科大學附屬醫院へも左の如く、物を惠まれたり。

日本赤十字社病院救助患者
　雙子縞二十反、木綿裏地二十反、
　裁縫料金七圓

醫科大學附屬醫院救助患者
　雙子縞二百廿五反、木綿裏地二百二十五反、
　裁縫料金七十八圓七十九錢

●奉悼の唱歌　高等師範學校附屬音樂學校に於ては、左の唱歌を出版して英照皇太后御葬儀、及

ひ御祭典の節適宜の場所に於て、諸學校生徒に唱謡せしめ、敬悼の意を表せしめたりと。

皇太后陛下の崩御を悼み奉る歌

第一章

ときはなるまつの葉のいろのあをやまに
ちよもいませといはひしわがきみ

第二章

世のなかはかなしきものかまつの葉の
ときはにまさですぎにしわがきみ

●舊岡崎藩主北堂の逝去　舊岡崎藩主子爵本多忠敬氏の養母久子は、故忠直氏の室にして、二十九歳の時忠直氏卒去し、爾來落飾して、貞操院と稱し、淑徳の聞ありしが、客月三十日四十六歳にして逝去せり生前歌道を嗜まれたる由にて、かつて詠まれたる十二ヶ月兼題の歌は左の如くなりしと。

早梅

あら雪はなほふる年に咲き出でゝ
またき春あるにはのうめか枝

若菜

春くれど柴やく尼もいとまあれや
かすむ濱邊にわかなつむなり

春雨

宵の間に雪けさそひしかぜたえて
更けてしづかに春雨ぞふる

落花

さらぬだに色もうつろひちる花を
いたくな吹きそ庭のはるかぜ

更衣

をしまれしはるの袂をぬきかへて
名殘もうすきなつのころもて

水鶏

月を見んかせも涼しとさゝぬ戸を
いつこをたゝく水鷄なるらん

避暑

世にたへぬ暑もともになかるらん
きくも涼しきやまのたきつせ

朝顔

朝ゐして見るははつかしめもあやに
またき咲きそふかきの朝かは

擣衣

ねもやらでとなりは月に明すらん
わかつきかけてころもうつ聲

惜秋

をしむかな千草の花もむしの音も
殘りすくなきあきの日かずに

寒樹

木々はみな落葉しにける庭の面に
のこれる松のいろぞさむけき

冬月

しくるゝと見しうき雲は吹きはらふ
あらしにさゆる冬の夜のつき

◎褒賞　從五位下田歌子の君は、明治二十四年十月、震災の節、岐阜縣下被害學校建築費中へ金圓を寄附したる廉を以て、客年十一月廿五日、賞勳局より褒狀を下賜せられたり。

◎看護婦の叙勳並賜金　日本赤十字社の看護婦として、明治二十七八年戰役の際盡力せしに依り、叙勳及賜金の御沙汰を蒙りしものは左の如し。

高山みつ、大久保てる、大越たま、今井わか、秋間ため、加藤秋信、背古千賀、竹中すゑ、西澤みれ、田中させ、菊池やす、伊藤きん、土屋かれ、貞末まき、青柳なを、久島さみ、太田なみ、野村千代、淺井なめ、神藤たい、加藤さし、堀越たか、三木勇、山田ひさ、高木さよ、川村むめ、大塚まもろ、鯖士まつ、篠原いま、

佐藤槍、河合きん、三木玉香、服部やす、田中ゑつ、周防長、加藤まさ、市川たけ、松澤ゑつ、林英、大久保れん、増田乙苗、植山みつ、原よし、土山すゑ、藤野鶴代、御園まつ、若山ちつ、加藤はま、高村ます、九鬼こよ、新井くま、梅津さと、綿谷政利、松井於登、荻原たけ、酒井ひさ、矢田たけ、野崎しさ、坪井こう、中山春江、黒田てる、北條ろく、阪本良、鈴木くら、高田やゑ、岸止、千谷とも、仁米葉、豊島いわ、中井かつ、杉山かれ、的場みつ、鈴木かつ、森だき、泉山小宮、村瀬ひさ、橋本はる、在山のぶ、大西千代、高柳いそ、加藤てい、加藤ふみ、小野はる、島岡らく、千種やゑ、朝比奈さら、服部たき、小牧ぬい、向山つる、宮山ちか、中村かれ、森田ゑい、吉村たか、清水ふき、庄田もよ、住江かれ、近藤かつ、野山かれ、袖山きよ、牧野まさ、田島ひで、岩瀬香、大小きよ、石川なつ、星さよ、山本縦、片山ふさ、土居すゑ、松川ひさ、加藤ふく、堀させ、御園はま、原千代能、山上ちよ、藏山ひさ、石野しづ、佐藤さら、山田すが、加納ゑい、相澤しげ、木下たか、小野はる、伊藤きわ、本間さだ、森みゐ、村山みす、飯塚ゆき、伊藤まるの、中澤やす、中村かめ、加藤なか、末木すて、島畑ちか、福田さよ、新島やゑ、高木はる、山室さだ中村ぬい、西村たみ、磯山藤榮、廣瀬れん、宵山なか、田宮てい、佐々木藤江、杉本峰網、二階堂小春、長澤きよ、鹽見ふさ、弓削すみ、河野儷嬢、伊米しま、藤まら、荒川もと、田中さだ、大原なみ、鹿野とみ、竹内はま、羽山ちづ、御園いま、大塚元能、河波季、西田江、荻野はる、小泉みさ、藤林ます、黒山ふさ、平山かつ、井上ぬい、松本ちつ、寺川たか、安井もさ、松本ちか、山根ろく、日下つれ、東たつ、二川ひさ、河原林すが、玉木常盤、上羽しま、廣山きぬ、俵しゅう、小瀧ゆき、田中もと、吉岡きぬ、北村ぬい、岩波わき、伊藤ひさの、松井まき、鈴木はま、乙政まき、余山たつ、中島千代、永幡しゅう、木村はるゑ、一色のぶ、小野ちゑ、中島うた、小池ちよ、川崎はる、五十嵐さし、時岡しづ、高波しが、岩谷ぬい、澤野まさ、内藤はる、野村櫻尾、大塚すゑ、梨本ちか、田中くわん、瀬良つれ、平澤てい、荻野さめな、岡賀たけ、榊原かの、野津たみ、永戸きよ、山村れん、井戸あい、岡村きくや、小澤みさを、内藤つる、内藤くら、高橋まさ、古山じゅん、大久保こたま、安福ゑん、増田ふみへ、入江たま、二宮つる、佐藤すゑ、町田みつ、山本のぶ、北村くに、吉田やす、土肥しげ、野瀬なみ、村田れう、中島かめ、西村みほ、師岡藤江、玉林草、平井ちやう、山鹿しつの、片岡じつ、寺本常誕、猪股ゆき、渡邊くら、今道てる、遠藤はつ、松本むら、稻川きん、飯島かれ、岩山わか、水野けい、柳澤よし、内田せい、宮島さう、樋田ひで、江澤まさ、原田ゆか、臼田次司、關根てつ、三木さん、田部井はる、久野まち、石渡あさ、佐野やす、齋藤しげ、堀江なべ、菊池ます、里見なみ、佐々木しげ、黒澤きよ、細谷はま、大迫さき、佐藤娘、津田たき、牧やす、岩本信、野村じやう、林さく、武藤かく、深見ゆた、片桐ひさ、石田すゞ、山口てい、江端よれ、藤村しん、武山こさ、成田みつ、林はな、服部たま、岡本くに、渡邊さも、堀尾つう、名倉かた、上山れい、柴山かめ、松浦かぎ、熊松あや、吉村ふく、下山わか、長島せき、大橋かれ、五味かすよ、服部さく、小川かれ、山田しげ、五島てる、西岡ま

さ、長谷川りつ、大谷せん、藤村千代、有我ゑい、片野のぶ、中村はつ、稻垣ゑい、早川しげの、眞山かめし、水谷しげの、内田ちか、興津よも、山本乙亥、岡澤ちか、池田みし、安田惠美、伊藤しげ、鹽澤きくの、吉村りよう、佐藤ふじ、松良すゞ、佐藤いよ、小松みちよ、鎌田しげ、渡邊たま、渡邊きくの、佐伯つるよ、金剛みつゑ、川村さき、梶沼さもよ、齋藤いよ、駒井やす、五十嵐たま、濱野ゑい、眞山たか、阿部はるよ、高田はる、横内さめの、原むめ、田村かう、酒井すゝ、横山もさ、吉田むめ、石田たつ、小川よし江、青山みつ、横川きよ、秋間きく、河村きち、小谷つれ、神尾しか、荻きく、丹上皆、荒木さき、中林茂枝、源堀みゆき、木村たな、大谷駿、駿河なか、駿河みさり、津田操、七尾順、落合はや、八田澤、石川なか、中吉孝、大家初枝、藤原きくの、刑部てる、佐々木ちか、森山いし、水上ひさ、大野わい、佐々村はる、安田ゆき、平野こう、廣江ゆき、黑川てう、大塚しゑ、武井らく、林原しげ、平野よし、田中たけ、間瀬ゆき、立脇きみ、佐々木はつよ、間瀬みつ、渡邊さよ、吉阪させ、加川さよ、大内かめ、池本つたゑ、合田靜、山川小松、林八重、山部さめ、谷田傳、淺井左姫、武内みれ、山本ちかの、岩崎わひ、九津見猷、渡邊さら、谷金、磯部みよ、柴岡鋭、太田喜野、高橋菊、渡邊金、土居千賀、山本勸、花田まさ、川村もさ、木澤めい、田中紫枝、井上京、野島はな、佐々木さよ、葉佐井みつ、岡さは、大黑信、三浦操、山野井さく、堺島すゑ、高木てる、岩部みつ、忍うき、村山崎、井上みす、杉島かれ、山本やゑ、熊谷はゑ、藤村みち、黑川たか、東きぬ、松原みつ、長澤みな、早川くら、田中あさ、中井さか、佐々木むら、紀伊潮みさ、箭田たき、藤田つれ、濱井こう、藤田やす、宮原すゑ、北川ゆみ、中村よし、中谷さみね、倉田光枝、岡本たつ、家村孝、濱野みつ、末永らよ、鈴木すゑ、渡邊りう、高須つな、米田さだ、小松めさ、桂はる、青木るね、阿武きち、島田みち、水田つる、松岡こてふ、岡のぶ、鹽山さく、金子あさ、岩崎かめ、細谷ふさ、河内ちか、石崎ゆき、水田りう、山本たけ、村上すま、鳥井さん、杉野ちせ、湯淺わい、新居きさ、井上さく、木岡きく、阪部つる、中村ちよう、川口もさ、高島りく、中村くに、宮本たき、中村ねん、島田せい、小川ふゆ、八阪さだ、山田つれ、鹽田たか、丹羽ひさゑ、清水つな、片岡ひさ、岡田さだ、宮武なるな、小川きく、大西きく、大友ふさ、原よれ、稻川りゑ、後野いわ、山田いほ、野田さみ、金子やそ、高村せい、坦本しづ、門屋ふさ、古谷のぶ、土岐いそよ、友近さよ、本出じん、中村もさ、竹村つま、山田のぶ、村尾しげ、野中さし、田那邊すゑ、織田いち、隅家じゆん、安部かや、金子はま、龜井ゑい、井手ます、庄司たつ、安武さもお、三浦みれ、片山いち、城戸よし、石井つて、淵さだ、原ひでわ、廣瀬しづ、藤野さよ、篠原さき、森ます、井手すが、後藤そで、田中たま、牛野みどり、堀さよ、小川こう、濱しげ、小河原さみ、三浦ちよの、阪本ひで、香月あさ、米澤たき、加藤いわ、中原きわ、横田まつよ、阪元梅野、淵崎そよ、淺山はし、西島峯、永野ゑい、秀島はつ、宗村みつ、赤尾てい、高田むめ、合志千壽、山北みせ、小島みつ、德永幸薰、

岩橋きよ、衣笠その、宮崎壽代、杉本とも、錦水志能、水野たか、四ときく、佐藤きわ、松本こさ、扇子ひろ、後藤千代女、堀千年、今井みな、今井みわ、赤阪かや、原いま、奈滿いは、平川とも、町田ふい、粟川とふ、福永はな、菅とも、西田ふで、相良さく、有川みさ、永田おい、永田なか、上村つげ、本田つや、園田のぶ、松本らか、樺山まゆ、佐々木ます。

●梅田雲濱の姪客と往事を語る、　府下神田區駿河臺の閑窓に靜に世を送らるゝ山田時章といへるは少時山田勘解由と稱して王事に盡瘁したる人にして、その配登美子女史は、梅田雲濱の姪にして、國學に通じたる人なり、此の程客の來りて、四方八方のはなしより往事の事に及び、客は、登美子女史が雲濱先生の姪なることを能く知れるを以て、先生と交りし志士の事などさまく\に問ひけるほどに、客のいひけるは、安政の頃西郷隆盛は深く先生に交はれりと承はりしが御存知なきやと。女史は打首肯き「左樣でございます、兩三回れ來訪になるをれ見かけ申しました、薩摩音にて三十才位の、非常に肥つたお方の樣でしたが、妾もそのお歸りの時は、玄關までれ見送り申せしに何だか甚だしい臭氣が玄ましたから後叔父に、只今のれた方は大層臭いれた方ですねと申しましたら、叔父は笑つて、彼はえらい人物だ、臭いのは英雄の香だらうと申された事がございます」と打笑めた、時章氏傍より、夫は其筈だ西郷は肥つて居て便所の始末が何時も十分出來なかつたと云ふからと、一座絕倒したりとなん。客又今の松方伯は如何なる人なりしやと尋ねけるに伯は當助左衛門とて、隨分元氣よき人なりしが、久しくれ目にかゝらぬゆゑ、多くは忘れがちなれどゝしばらく考へ居りしが、一事思ひ出せしことありとて、左の一話を語り出でぬ。

或日妾は京の青蓮院宮に居合たりしに、突然玄關に

「頼む」との聲聞ゑければ、誰にかと出で見るに、何の人影も見えず、はては不思議の事と佇み居たる程に、從者らしきものども七八人周章てゝ馳け來り只今薩摩の武士騎馬にて、我が主人四條隆謌卿の御前を乘り拔け、此の御門に入れり、早く出されよと聲高く打ち騒ぎけるに、妾は心に思ひ當る事あれども、否誰も參らずと答へけるに、渠等大に怒りて御厩に繫がざる馬の沫を吐き居るを見たり是れ何よりの証據なり匿さるゝは迷惑なりと迫りしゆゑ、妾は容を正し、此は奇怪ぬ事を聞くものかな、此邸を何と心得居る、靑蓮院宮の御殿とは知らざるか、公卿の家來の分際として、宮の御厩を、案内もなく覗しは無禮なり。薩士の入り來りしと否とは暫く措き、無躾にて御厩を覗ひし狼藉の振舞より先づ正すべしと、故らに聲を勵して詰寄れども、渠等返すべき言葉なく立去りけり。やがて物蔭より出來りしは、助左衛門殿にて、御蔭にて助かりたりとて笑ひ興せし事ありしが、當時は士分の者公卿方に無禮せし中々輕からぬ事にてありしと。

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

甞て面白い話を聞いた事がありますが、香港から廣東の間を往復する一種の蒸滊船がある、棚の高い様なので夫に澤山乘つて行くといふ船がある、或時にどうかして船が覆り返て、支那人が水の中におつ落ちた、さうすると傳馬を以て陸から救ひ上げる、其救ひ上げるに、段々拾ひ上げて居る中に、一人の救ふ者が、助けてやるから助け賃を百圓出せと或る支那人に言つた、さうすると云ふと、

其人は高い負けろ、負ける譯に行かぬ、そんならもう死ぬる、百圓出してたまる者かと言て遂に溺れ死したさうです。さう云ふ危急の時に至つて、死んでも百圓の金は出さぬと言ひ、又一方も人一人殺しても、百圓出さなければ助けぬといふ事を言ふ、作り話かは知らないが、支那人にはありそふな事である、日本人の氣象にしたならば、決してそんな時に乘じて金を出せといふ事は言はぬ、又一方も、そんな時に金を出すことなら、死んで仕舞ふと云ふことは決して言ひはしない、日本には此の一種の氣象がある。此即ち事に臨みて自から利するといふ心の薄いのでありて、忠君愛國の心の上に、大變に利益を爲して居る。去ながら、又斯樣に申すといふと、今日以後はさう行かぬ、一躰國を富ますには、人々勤儉して行かなくてはならぬ、節儉の道を講じて行かなくてはならぬ、即ち節儉した者を以て貯蓄するのである、其貯蓄の方法を段々覺へて行なければならぬ、一人が十圓溜めれば、十人の百圓、百人の千圓と、算盤の珠を彈いて行く、さうすれば國家の富源である故に、殖産興業の道を覺へて行くのにも、餘程節儉の道から敎へて行かなければならぬと云ふ者もある。是も尤もであります、國を富ます事は必要である、故に人々段々財を蓄へて行く方法も知なくてはならぬ。併ながら、此金を溜めるとか何とか云ふ方のことゝ、忠孝節義の爲に一身を抛つとか云ふ心を高尙にする方の敎とは、どちらが難いかと云へば、勿論心を高尙にして行く方が難いと見なくてはならぬ。さうして、又、國家全躰の爲には、心を高尙にして行く方が多く必要であろうと思ひます。

支那人の、百圓出す位ならも死ぬるといふ方が澤山あつても、其國は強くならぬ、左すれも子供抔に敎へますのに、餘り心を小さくして、所謂シワン坊見た樣な風に敎へて行くといふことは、或は得策で無からうと思ふ、こゝは、私は餘り斷じて言ふ事は欲しないのでありまする、といふのは、或は田舍の學校に依つては、小學の兒童に幾らか金をやつて、其中から少し宛、一錢、半錢づゝ溜めさせるといふ樣な稽古をさしてをる所もあるらしうござりますから、夫れを、一槪に惡いといふことは、決して言ふのでは無いのでありまする、或は夫れも仕方に依つては、宜いかも知れませぬ、併ながら、ドウモ仕方をやり損へも、人の心をケチン坊にして一向高倘の心が無く、一心に己れの利益のみを第一に考へ、とう〳〵支那人の樣になつて仕舞ふ。

新刊のいろ〳〵

◎英照皇太后の御偉徳　東京神田同文館主森山章之丞氏に依りて編纂せられ發行せられたる者なり。題する如く英照皇太后の御徳を謹載したるものにして、卷首には名家のものせられし哀悼の歌文を附す。哀悼の意を表し、かねて皇室の美德を學生諸君に知らしめんが爲、此の度非賣品として一万部を限りて發行し、全國の各學校へ寄贈したるものなりといふ、御望みのものは其校印を捺し、郵券二錢を封入して申込めば直ちに送呈すべしと。美擧といふべし。

◎女學講義　第十五卷　一月三十日發行　卷首に皇后宮下賜の大御歌を掲載す、頗る美麗なり。其の他は例によりて例の如く別に評すべきなし。只稍々平易にして講義を進むるのみ。各科ともかたがき附人物の御揃ひは紙面なか〳〵にぎやかなり。

◎信心堅固なるべし　これ女學雜誌第四百三十五號(二月十二日發行)の社說なり、例の簡雅な筆を揮ひて信心の功德を說き、世のはかなきをさとし、早く惰眠を開きて安心立命の域に入れといふ。信心の緊要あながちに疑しきに非ず、然れども、邪宗の敎は之を信ずべからず、曲說非法は之を信ずべからず、信ずべきは只我が固有の正敎あるのみ。

◎婦人弘道叢誌……第二十八號一月發行　婦人弘道會

◎婦學叢錦……第五十一號一月十五日發行　東京尚絅社



二月廿日兼題　湖上霞

天

吹きわれしひらのね颪し音たてゝ
かすみそめたる滋賀の水海
伊勢州飯南郡櫛田村　近藤ふく子

地

みわたせば滋賀の海つらうち霞み
よする波さへしつけかりけり
東京日本橋區濱町一丁目廿四番地　井久良子

人

あふみの海ひらの山風さむけれど
ほの〳〵かすむ波ののどけさ
駿州富士郡今泉村　櫻井りん子

秀逸　（十五首）

からさきやしかの浦わをこく舟の
ゆくへも見えす立つ霞かな
永井さい子

こきなれし舟人いかにまどふらん
かすみにうつむしかの水うみ
德永萬壽子

唐さきの松のみどりも立ちこめて
かすみにけりな滋賀の大和田
名取正代子

見渡しの滋賀のうなつら霞みけり
沖のしらほのみわかぬまて
加藤さく子

見わたしの山も浦わもみわかぬまて
霞みこめたり諏訪のうみつら
寺井登起子

うちみれはかすまぬ方もなかり鳧
志賀の浦和もひらのみなとも
高田米子

あふみの海風しつかなる波の上に
たちはこりたる春かすみかな
土肥仙子

はこね山をのへは雲のとちなから
水うみとほくかすみたなひく
瀧かよ子

から崎の松のみどりも見わかぬまて
廣田とめ子

かすみにけりな志賀の水うみ　林　久子

網引する蜑のみもれてさゝなみの
しかのうなつら霞みこめたり　中桐　杏子

さし波のよする音さへ志つかにて
霞みわたれる志かのうみつら　柳田　里子

唐崎のまつもたはろに見ゆるまて
かすみわたれるしかの海つら　吾妻　近子

春されははこねの山もゆき消えて
あしの海邊にかすみたつみゆ　田中　冬子

四つの緒の調へに似たるなみの音も
かすみにこもるひはの海つら　高田きよ子

春風にこほりもとけてすはのうみ
霞もなみもたちそめにけり

（以下原稿到着順）

春風にこほりとけぬとすはのうみ
かすみの橋をかけてけるかな　木川　里子

唐崎のまつにかゝれるあさかすみ
浦のとまやにはるはきにけり　楠　梢　子

からさきの岸のまつか枝ゆき歸り
蜑へゆくまにかすみたなひく　島田　好子

さゝなみや志かの浦まつ風たえて
かすみにきゆる竹生志まかけ　中島　房子

からさきのまつにかゝれるはる霞
かすみて見えぬ瀬田のなか橋　野田千代子

志かの浦はうちかすみけり唐さきに
さゝなみよする音もきこえず　大島　愛子

鑑にうつすふてもたよはし唐崎の
まつにかゝれる春のかすみは　町田つる子

志かの浦の長閑けき波にこくふねも
かすみわたりてみゆるはる哉　神田　静子

からさきの松にもかゝる朝かすみ
春たつ今日はのとけかりけり　溝口　信子

東路をいつかすきけんはるかすみ
箱根のうみにはやたちにけり　佐々有鄰子

すはの海こほりもとけて春のきる
かすみのころも色まさりけり　佐々小琴子

水海にかけわたしたる勢多のはし
なかはかくして立つかすみ哉　仁保　恭子

影うつす富士のみ雲もはるくれは
かすみにきゆるあしの海はら　吊山千代子

さゝ浪のおとこそ春もよせくらし
いふきおろしの末かすむなり　鳥山百合子

いろくつに世わたる人も湖の上の
立てるかすみに路まとふらん　星野かず子

ほの〳〵とまつは霞につゝまれて
さゝ浪よするしかのうみかな　星野ひと子

いつかはとれもひしみねの氷とけ
かすみたなひくしかのうみ哉　星野康世子

いさり舟みえつかくれつ志かの浦
ほの〳〵かすむ朝ほらけかな　鹿野　靜子

志賀の海棚ひくひまをこきゆけは
霞のころもわれはきにけり　美奈井芳子

ふしかねの裾野の八のうみつらも
一つになしてかすみ棚ひく　坂田喜美子

からさきの松にもはるの色みえて
さゝなみ霞む志かのうみつら　羽田三緒子

すはの海やのこる氷もいつのまに
たちかはりけん春のかすみと　河田いし子

さゝ波の音ものとけくきこゆなり
かすみたな引くあしの海つら　佳山　幾子

唐崎のめなれしまつもわかぬまて
たなひきわたる朝かすみかな　澤野　芳子

棚ひける夜半のかすみに影ふけて
かたふく月のとはつあはうみ　吉野波字子

三井やはし朧にそれとみえなから
かすみわたれるしかの浦つら　金子はつ子

くれなゐにしかの浦波立ちこむる
かすみにたどる春のふなひと　壺井美幾子

御墨の蘭津のみつうみゆくふねの
ほ影も見えすかすみたなひく　田代　綾子

志賀の海行きかふ舟もわかぬまて
波の上とほくかすみこめたり　田代　艶子

八重かすみ松にたゝよふから崎の
水面のかけのさやかなるかな　西元とも子

世にはやす詠めにそへて春はなほ
かすみわたれる志賀の浦なみ　瀬戸　榮子

見なれにし島の影さへおほろけに
遠くなしたるあさかすみかな　伊藤きよ子

行きかよふ舟も波間に見えかくれ
かすみ込めたり島のうみつら　牧山きよ子

春かすみ立ちこそ渡れすはの海の　中山登美子
ゆきかふ舟はれとのみにして

あふみの海春立ちそめて此の朝け　櫻井　花子
かすみにうかふ三井のふる寺

近江のや志賀のみつ海はる立ちて　丸岡三六子
なかははかすむ勢田のから橋

まほあけてかへる矢橋の夕なきに　日高かず子
煙とみえて立つかすみかな

春かすみ立ちにけらしなすはの海　諸井　貞子
ゆきゝの人もみえすなりけり

春かすみたなひき渡るみつうみは　遠藤　米子
こきゆく舟もかすかなりけり

さゝ波や志賀の海つらこくふねも　山口やす子
景色に見せて立つかす哉

辛崎の松のみ見えてうら〳〵と　岩城まつ子
みなの上遠くうちかすみけり

去年とちし氷もいまやとけぬらん　山本きよ子
すはの海つらかすみ立つみゆ

をちこちに島山かけのはの見えて　今井　元子
のとかにかすむ島のみつうみ

うら〳〵と霞み初めたる志かの浦や　平山　房子
空もひとつにみゆるのとけさ

うら〳〵と霞みそめけり琵琶の湖　佐藤よし子
こきゆく舟の見えつかくれつ

しかの海あしの若はのもえそめて　得田なか子
あかつきふかくたつかすみ哉

水やこれかすみやそれと志賀の浦　森　琴子
しかともわかすけさの眺めは

いさやいさ打出の濱にうちいてゝ　森　國子
かすみをなみの上にとはなん

にほてるや近江の海のなみまにも　森　雪子
春をうかへてかすみたなひく

とちはてし氷のはしもうちとけて　小町谷りえ子
かすみわたれりすはのみつ海

玉くしけふたとりみれははこね山　小町谷蘭子
かすみにあくるあしの海つら

すはの海の氷もとけてうら〳〵と　佐藤幾世子
かすみたなひき春は來にけり

諏訪の湖や千舟もゝふねこく舟の　飯田ふさ子
影さへきらふはるかすみかな

琵琶の湖やさらてもとほき浪の上を
　猶たちこむるはるかすみかな　木口いつ子

かゝみ山いつる日影を待ち取りて
　かすみそ渡る志賀のからさき　和田不二子

朝なきに見んとれもひし琵琶の海
　比良のたくまて霞みわたれり　和田　秀子

ひらのねはかすみにきえて唐崎の
　松さへわかぬゆふまくれかな　仁井田富子

朝ほらけ遠さかり行くかすみより
　わらはれにけり沖のしまかけ　松村　綾子

ひさかたの空ははれゆく朝ほらけ
　かすみにうつるわまのつり舟　吉田八重子

ほの〳〵と水面離るゝかすみより
　こき行く白帆見えつかくれつ　吉田　靜子

近江の海行きかふ舟のかす〳〵も
　ほのかに見えてかすむ春かな　山田　錦子

行く舟は波路はるかにうちかすみ
　なほとほさかるしかの海つら　有坂　清子

すはの海のこほりし波に打ちなひく
　かすみや春のすかたなるらん　太田　貞子

まほわけてこきゆく舟もみえぬ迄
　かすみにこもるしかのしら波　田島　龍子

見渡せはしかの海つらうなかすみ
　うをつる舟もれほろなりけり　榊原八千代

鹽ならぬうみの上にもはるたては
　波路はるけくかすみたなひく　福原　眞子

阿蘇か根の烟はかりをのこし置て
　繪圖のみつうみかすみ棚ひく　仁保志解子

さゝ波の音もしづけくうら〳〵と
　にほてるうみにたつ霞かな　星野　曆子

見れと〳〵霞なりけりわつさゆみ
　いしらか崎やいつこなるらん　長山　孝子

鹽ならぬ海ゆくふねのみえぬまて
　のとかに霞むはるのわけほの　富士村幾子

君か代にわふみの海を見わたせは
　さゝ浪とほくかすみたなひく　鈴木よし子

春かすみ海士の小舟をれはひつゝ
　こゑのみのこるしかの大わた　李家貞實子

春風にこほりとけゆきこくふねも
　遠くへたてゝ立つかすみかな　伊藤　春子

つくはねの雲ゐと見しは花ならむ　遊佐とよ子
　かすみか浦もうちかすむなり

今朝見れはしかの湖かすみたち　遠藤ふぢ子
　ほのかに見ゆる竹生島やま

なかむれは琵琶のみつうみ霞たち　成田のぶ子
　帆わけし船の見えつかくれつ

長閑なる春のすかたやきのふけふ　戸塚てつ子
　かすみそめたりすはの海はら

いつしかも氷はとけてはるかすみ　木村みつ子
　立つものとけしすはの海はら

さゝ浪の音はかすかにきこゆれと　舘脇ます子
　霞みてみえぬすはのうなはら

ゆく舟の遠きはみえすいしやまも　小曾根しうナ
　かすみたちそふしかのみつ海

しかの海かすみそめたる朝またき　萩原　章子
　にほひてみゆるおきつ島山

見渡せはしかの海へにかすみ立ち　高橋とし子
　見馴れし島もとほくなりけり

春かすみわたれるさちの海つらは　大谷津こと子
　けにものとかに見えにける哉

舟うかふしかのみつうみ見渡せむ　石川すけ子
　霞たちそふの今日ののとけき

朝またきしかの海邊を見わたせむ　楠木とよ子
　かすみたなひき春は來にけり

舟のみかしかのから崎いつくへも　青木　春子
　春はかすみのたなひきにけり

朝またき立ちいてゝみれは水海に　二上ひさ子
　一重たなひくはるかすみ哉

たえ〳〵に行きかふ舟のみゆる哉　田谷秀代子
　ほのかに霞むひはのみつうみ

しかの海こきゆく舟もみえにけり　田谷美壽子
　かすめる波のうねのまに〳〵

志賀の浦やれとなき波に漕く舟の　矢刎　雪子
　ほのかにかすむ春ののとけさ

志賀のうらの霞のしたのさゝ波は　中島　丹子
　はるたつ空のしるしなるらむ

春立てたなびくかすみが浦の邊は　村瀬　直子
　松ふく風もかすみそめたり

濱名の海おきへはるかに霞みけり　村瀬　久子
　行きかふふねの影もくもりて

けさみれは比良の高峯の雪きえて
かすみそわたるせたの長はし　一番ヶ瀬つぎ子

うら〳〵と波の調へものとかにて
かすみこめたるひはのみつ海　北川はな子

よる波もこきゆく舟もかすむなり
しかのうらはの春のあけほの　矢野うめ子

しかのうみ海士の釣する小舟まて
かすみの網のなかにいりけり　犬甘芳子

積りてしみやまの雪もとけぬらし
かすみこめたるすはのみつ海　内田つる子

玉くしけはこねの海のなみの上に
のとかにはふ朝かすみかな　降田槇子

かすよみし島さへ見えすなる辺に
かすみにけりな越のみつうみ　高田さと子

みとりなる水のおもてに朝かすみ
棚引く今日ぞのとけかりける　失名

船とめてさやにみせしをかゝみ山
かすみわたれり志賀の大和田　河野文子

まほかたはこきゆく舟の長閑にも
かすみにきゆる志賀のうら波　廣川すゞ子

けさよりは春の立ちけんうら〳〵と
かすみたなひくしかの海はら　中川操子

にほの海たてるかすみも長閑なり
世のうき鹽のみちひなければ　吉村操子

朝またきしかのおほうみ見渡せは
波路はるかにかすみたなひく　山崎しづ子

いその遊はなほはだ寒く覺ふなり
なみもしづけく湖はかすめと　錦織さち子

ひはの湖磯遊のゆきは消えねとも
うらゝかにこそ霞み初めけれ　錦織久良子

諏訪の海やこほりをわたる人たえて
立ちかはりたる春かすみかな　及川千壽子

比良のねに積りしみ雪とけそめて
ほの〳〵かすむにほの海つら　大溪貞子

いつしかに比良の高峯の雪きえて
かすみにけりなにほの海はら　大溪繁子

さゝ波やしかの海邊にふね呼はふ
聲もかすみて長閑けかりけり　多賀能初子

長閑にもかすみ渡りぬからさきの
ときはの色も見えわかぬまて　齋藤しな子

吹きれろす比良の嵐はさむけれと　村上岩子
かすみそめたりしかのみつ海

今朝見れは比良の高ねの雪きえて　秋場満春枝子
竹生しま根にかすみたなひく

一月廿日兼題　電話

天　肥後國熊本市京町　木川里子

世の中の進むにつれ、萬のわざ何くれとなくひらけゆきて、あやしきことども彼是あまたあれど、わきてくすしきものは、電話になんありける。うちはへたる金線一すぢをたどりて、なみゐしこともなき遠方の人とも言葉をかはし、昔ならんには玉ぼこの道をゆきかへりして、いたづらに時をもつひやしぬべきを、居ながらにして、何ごともおもふまゝをかたりあひて、ただ其の人にさしむかひたらんこゝちせらるゝは、いとたふとくもまたをかし。かゝるいみじきことどもは、今より三十年のむかしの人々は、夢にだにおもひ設けぬことなるべしと思ふにつけても、明らけく治まる御代の御恵みこそいとありがたけれ。

地　筑前國嘉穂郡飯塚町　林久子

ちまた行きかふ力車をさへ、こよなき物といひしきのふにひきかへて、吾が山さとも、日に月にひらけゆくよの恵みのうるほひて、汽車電信さへいてきたれは、千さとへたてし國さへも、いとちかき心地のせられて、たよりよきこといはんかたなし。そかなかにも、わきてあやしう思はるゝは、電話てふ機械になむありける。みは遠くへたてなから、吾がおもふことゝもいひやれは、たゞひとすぢのかねの糸をつたひて行きかふうちにも、言の葉のみだれぬのみか、聲さへもまゝなれど、まのあたり其人とかたらふ心地のせらるゝは、いかにたくみてつくりなしたる物ならんと思ふにも此のうつはをたくみなしたる人のいとたふとくおもはれてなむ。

稲づまのひかりによせて言の葉を
かよはす御世にあふぞたのしき

人　岡山市八番町　降田槙子

世の開け行くまにまに、萬便利に成りゆくこと、今

新しう述べんも、愚なり。ことに理學と云ふ學の進み行きては、驚くべき發明の出で來るぞ尊ときや。ろが中にて、かの電話と云ふものこそ、げに、便利の極みなりけれ、そも此のものは、エレキの力をかり、入りくみたる、仕掛によりて、ほど隔りたる處より、自由自在に談話することを得ること、たゞさし向ひ居て、萬の物語するが如く、如何なる、急の事にても、またゝく間に辨ずることを得るなり。こをされど、今我が國にては、九重の雲の中にも、こを設けさせ玉ひ、其の外、さるべき商店會社などには、皆こを仕かけ、ことに汽車の停車場には、何れもこの設けありて、驛より驛へ、くさ〳〵の、事を云ひやり云ひ來るとかや。げに〳〵、便利とも便利此上やはある。こを古人に見せなど、いかに驚くならん、いかにあやしむならん。さは云へ、これ等のことをはじめて造り出でしは、皆西の國人なりとかや。大御國の人々、いかで、まねびてのみやまんや、つとめ勵みて、なほいやまさりたる、發明をなさでやはあるべき。

佐々有鄰子

（以下原稿到着順）

世の中ひらけゆくにつけ、ともにひらけゆくもののさはあるなかに、いとたよりよきは電話になんありける。いかにとなれど、田舎びとは、いまだ目に見耳にきかねど、内日さす都大路は、蛛蜘のいとの如く、四方にかけわたして、朝より夕にいたり、なにくれの言とひも、此術によらぬはあさきほどになりぬとか、天さかるひなの長路のれくかけてひきわたすらん電話線も、近き年月のうちなるべく、指をりて晝夜わかで待つ身となれるも大御代のふるき御惠の露に潤ひてのことにぞありける。あなうれしや。

山口やす子

文の道の開くるに從ひ、人の智識も、驚くまでに進み行き、天の工を奪ふほどの、くさ〳〵なる發明あるがなかに、電氣作用を究めしより、功蹟の大なるものなかるべし。ふるき昔しは、をぞましくも。唯電氣を空れそろしきものと思ひしを。今や之を意の儘に使ひ用ひて、こよなき世の便術となし得ぬることそいみじけれ、さてや電氣の運用もて要ゆる器機は、其數亦多くあれども、殊に電話てふものは、程近き發明にして、遠く隔てし處にても、居ながら相對ひ

て話すごとく。瞬くひまに、人のことの葉を聞きも し傳へもなし得べき、いと妙にも便利なるものなれど、都には、はや蜘蛛のすを張りしごとく。架設しありとなん。田舎とて、斯ばかりめでたき利器なれど、いつしか用ひぬことやはある。遠からずして、深山の奥。深く浦里にいたるまで、之を見る時なからずやは。

土肥仙子

世のひらけゆくにつれて、おのづからことわざしげく、時の間をあらそふ事も多くて、さるをりには、いかにとくはしるものに乘りてゆくも、たよはぬ事のまゝありがちなるを、ちかきころより、電話てふことの、いできて、もはら世に行はるゝ事とぞなりぬるされはこの電氣の力をかりて、かけへだたるさかひも、またゝくひまに、かたらはんと思ふ事のかよひ得て、まことに、事繁き人には、こよなきたからとこそ覺ゆるなれ。此の器を、おのが家にもすゑおかまほしうて、かゝるすぢこゝろえたる方へ、あつらへおきしに、このころ、やうやうなりて、うれしさかぎりなく、まづためしみるに、實にかなたの言のは、其人にうちむかひて語らふごとく、いとあざやかになん聞ゆる、こをすゑおきて後は、ひと日も欠くべからざるものと、いよいよめでよろこび、朝夕にもてはやしつゝあるも、思へは大御代のめぐみにこそと、ありがたくうれしうてなん。

佐藤よし子

世の開け行くまゝに、昔なかりしあやしき機の、多く設けらるゝ中に、いと面白う覺ゆるは、此機になんありける。その談話するを、戶障子など隔てゝ聞くに、人なきに獨り應對するかの樣なるもをかし。合圖の音のきこゆるに、立ちゆきて、機にむかへは、くさぐさの用向など、親しき人の口づから、つぶらかに聞くことをえつ、また此方よりも語りもしつ、顏は見えねども、あひたる心地なんする。世に音信を傳ふるものに、電信と書狀とあれど、この機は、よくこれらのよくせざることをなすものにて、室に居なから、用ある人と話されつ、大かたの事の、忽ちに便ずるは、其德になんありける。あはれ何につけても、もろもろのよき機の發明こそ、この世に益する甚たしきものにはありけれ。

得田なか子

近き頃より、電話てふものゝ世に出で、電信汽車とひとしく、進みゆく御代のなかだちとぞなれりける。身はかゝるわびしき村里にすまへど、未だ其仕組は見るによしなきも、わづかにその理のみはわきまへぬ。そは電氣てふものゝさようにて、いく十里の遠き道ながら、郵便電信の如く人してもたしめ、あるは、もじもてかくなどの、わづらひなく、思ふがまゝを、またゝくひまに傳へもし聞きもするは、さながら、その人とむかひたらんやうにて、其のはやきこと、電光石火もたゞならずとかや。げに進みゆく世のためしとこそいふべけれ。その世を益し人を利する、昔しの人のゆめにだに知らぬところにて、猶行く末の程も思ひやられ、かゝるめでたき御代にあひぬる身のさちの、かへすがへすもうれしくてなん。

懸田ふさ子

世の開くるまゝに、人の智慧もまして、便利なるもの、多く出來ぬ。わきて、電話機てふものゝ、便利なるには、けに、あやしう驚かれぬ。そは、電氣の作用もて、遠きよろ人と、いかなる事をも、ゐながら語らふことを得る仕掛なり。されは、ろの便利なる事電信などの、遠く及ぶべくもあらず、かゝる機械を、發明せしは、いといと、かしこきわざになん。

福原誼子

あきらけく、開らけ行く世のためしかや、いみじう物事も進み行きて、つかの間に、言の葉を、遠き千里につたへ行く電信機てふもののさへなりぬ、とはいへ、白雲の八重、九重のをちの、へだてあるも、さながらまのあたり話し語ふごとき、たよりあるは、電話機にしくものぞなき、殊に、商人の便利、いかでかりならん、實にくしきうれしき器にぞありける、ろれにつけても、物理の學のたまもの、大なることと、ゆめにも忘れかたしや。

長山孝子

日に月にひらけもてゆきて、いともあきらけき大御代は、千早振神代も去らぬ程のものいできて、國のために大利益をなす者少からさるに、人々の、最も便利とするは、電話きにこそあめれ。さるは、一筋のはりかねをひきはへたるに、人の言の葉のたとり行きて、又かへし言葉のかよひくるは、いとあやし

きまてめつらかにして、神ならぬ人の世のものとも
おもはえかたきはかりになん。

廣田とめ子

世には、傳言のたかひ、文のあやまりなと、ゆゝしき事ともなん多かりける。昔の人のたよりあしかりしは、いかはかりなりけん、然るに、月に日にすゝみ行く世は、汽車電信なと、うれしき物多かめるか中に、ひときはたくみなるは、電話機なりけり。はと遠くへたつとも、人の影こそ見えね、聲音も言の葉振もそのまゝにて、こちつけに物語りする心地せられ、よへはことふる聲の、やま彦ならぬそうれしかりける。かゝる事は、神佛のすさひかとあやしまるれと、理に理をきはめ作り出せるものにて、實におそろしきは學の力なりけり、今よりいよゝ開け行きなは、いかなる物をか作り出さるべき、あなあやし、あなくすし。

伊藤春子

年月の、移りかはりゆくにつけても、物事は、みな新らしうこそ、なりにけれ。そのうちに、殊にいと便りよきは電氣の作用なり、昔は、僅かの道にても、脚夫とやらの便りを、待たては、何事も通はさりしを、今の世は、電話といへるわさひらけてその機をそなへおく時は、數十里の道をはなるとも、細きはりかねの、糸をしるべにて、まのあたり、かなたの人とかたらふことを、うるは、實にたのしからすや。昔は見も、聞きも、せさりしを、かく見聞き、するにつけても、賤か身のさち、いくそくそ、これもひたすら、ひらけゆく、大御代のみめくみにこそ。

身は遠くへたてゝ住めとまのあたり
ものかたりするみよそうれしき

鈴木なは子

はなれ居て思ふこゝろを語らふは、文のたよりの外なかりけりとは、今の世の手ぶり知らぬいにしへ人の言の葉にてやあるならん。げに世は、進みに進みて、たゞ一すちの金の糸、よく野山遠き數里の外の人をして語らはしむ、其のかみ世の中さわだちて、夷はらひ盛なりし折には、中々に西の國のうつはなと用ひん事をいとひにけれど、かゝるためしは、耳にも聞かず、目にも見ず、やうやく人を馳せて、かたみに音づれかはすのみなりしを、今は此聖代

にあひて、大君の御めぐみの露のあまねく、學びやの窓の下なる文机により物の書片手に、異さとなるしたはしき敎の君、なつかしき友どちと、戲せある事共問ひつ答へつし、あるは、公のまがさちよしあし、しろ物の高下など、水ぐきの跡たどたどしう、染め流さんわづらひもなく、委しう語らひ得るぞ、明らけく治まる御代のめぐみと、嬉しうも亦かしこくおぼゆなる。たゞ惜しきは、其のはたらき數里にとゞまりて、千里へだつる、海のはて山の奥にまで、及ぼす事能はぬにあれど、こも蓄音器の出來て補はゞ、用たりぬべし。げにもげにも、十九世紀の世人の智識は、恐ろしきまで進みにけるよ。此のきはみに至りては、かくては見せじと心して、秘め給へる神の御手業も、やがてあらはれて、天の音づれ、陰府のたよりを、事なうなし得るに至りやせん、其時こそ待たるゝなれ。

內田つる子

凡そ世の中に、たのしき事數多あれども、はらからうちつどひてかたらふほど、樂しき事はあらじ。さるを、一人へだゝりたる所にすみなして、殊に女の

身にしあれど、對面する事もまれ〳〵なり、されど、いかにもして、日々の消息をだにきかまほしく思ひしに、ふと心づきし事あり、そは電話てふ者あれど、そをもてかたらむにはとれはねしかど、いろき番號などしらべてとひたりしに、あなうれし、いとなつかしき聲をもてこたへぬ。あらおのれ、とくより此の事に心づかずして、うつ〳〵と日を送りし事のおろかさよ。今は心もはれたれど、おのが業をつとめむと思ひぬ、さるにても、かゝる樂しみをなし得るは、これ皆開け行く御代の賜物なり。あな便りよき世にあひたる事のうれしさよ、思はずもろ手を合せぬ。

及川千ひろ子

古は、雷即電氣といへるものは、地震と共に、世の極めて恐しきものゝ、例にひかれ、人力の如何ともすべからざるものと認められたりき。されど、人の智識の、開くるに從ひて、今は、決して恐るゝに足らざるを知れるのみか、却て之を利用して、種々の用をさへなさしむるに至りぬ。近年、西洋より傳はれる電話の如きも、又その一つなり。同じ電氣の力

を利用して、音信を通ずる電信は、久しき以前に、是も、又西洋より傳はりて、今は、全國至る處に、その設けあらざるなく、都も、鄙も、あまねくその便を受くるに至りたれとも、電話は、漸く近年に至りて傳はりたれど、都にのみ行れて、何事もおくれがちなる鄙には、未だ設くるに至らず。されど、その便利の事に至りては、電信にまされるが如し。之を例へば、電信は、文章の如く、電話は、言語の如しともいふべきか。さはれ電信の利、かくまで大なるに、猶それをも足れりとせず、今一しほ便なる電話をも發明してその幸福を增し、文明を進めたる彼の國人のいさをし、げにいみじく貴きことになん。我等は、ゐながら、その便利を傳へ、その惠みを受けて、いさゝかのむくいだにせざるは、かへすがへす恥しく、口惜しきことならずや。

あはれ、世の恐しきものゝ一つに數へられつるいかづちは、已に西洋人の爲に利用せられて、世の中の便利をたすくるまめやかなる奴となり果りぬ。他の一つの恐るべき地震をも、その震動の、世の中に及ぼす災を豫防する方法を發明して、之を彼の國人にも傳へ、その惠みにむくゆるは、我等東洋人たるものゝ、任ずべき務にあらずや。わけて火山脈の上に家居する、しかも東洋の先進國を以て任ずる我等日本人の、さり難き任務にあらずや。

皇太后の宮崩御をいたみ奉りて　日高かず子

三十年のみたままつりの道かへて
れなし雲井にのぼりましけん

孝明天皇の三十年祭を遙に拜み奉りて　德永萬壽子

かざしけん君しまさねど旅はただ
三十年わだにはふはなかかな

小森山輝子

仝

大君のめでたまひけんうめのはな
ちるにつけてもしのばるる哉

深田祐子

仝

百敷ののきばにかをるやまさくら
なき君しのぶはなのいろかな

仝　佐々木琴子

黒髪をうちかへさんとたけびけん
かしこき御いつしのばる哉　本村嘉米子

仝

うめのはなにほふ御壺は三十年の
むかしの影もかはらぬものを

去る月うせ給ひし姉君のまだ世にま
せし頃賜はりし寫眞を取りいでゝ　櫻井はな子

諸共に行きて寫しゝうつし繪の
いまはかた身となりにける哉

寫眞を送るにつけて　服部かつみ子

色もなく香も淺茅野にみたれても
さく女郎花とは我か身なりけり

十四日雪いたう降りけるに甥の土岐
文二郎が尋ね來しに　小川直子

とひ來つるきみが情も降りつもる
雪のふかさによそへてぞしる

小竹武次氏が朝鮮にわりければよみ
てつかはしける　仝

たゆまじな虎ふす野邊の旅ゐにも
ますらたけ雄が大和ごゝろは

四條畷懷古　河野文子

たとりきてとふたにさひし北の風
われしなはてのむかし覺ゑて

冬のころこしの國にわりて　酒井たか子

七重八重かさなる峯もれしなへて
雪ふりにけりこしのしら山

寒月照梅花　仝

風さゑて匂ふのきはのうめか枝を
すこくもてらす月のかけかな

北海道にて數年を迎へたれば　加藤壽枝子

なかれ來てゑぞか小島にあら玉の
年をかさぬる身となりにけり

冬山　遠藤のよ子

錦なすもみちいつしかちりはてゝ
哀れもよはすをちのやま〳〵

初春山　町田つる子

はる霞立ちそめしよりふしのねの

ゆきのひかりそ色まさりける

春漸近　大森すゝの子

春もやゝちかくなりぬとさく梅の
枝にきてなくうぐひすのこゑ

早中梅　中島房子

うぐひすもまた聲たてぬ年の中に
にはの梅かかにほひそめけり

心　野田千代子

うたかたの浮身は露と消えぬもと
とゝめやれかん大和たましひ

春をむかへて　長田年子

世の人のれとづれたえし田舍にも
梅のにほひはかはらざりけり

春雪　山崎しつ子

この朝け木ずゑにかゝるしら雪は
花てふはなのはじめなりけり

山霞　仝

山の端はまたむらきえの雪なから
春をみせたるうすかすみかな
我か家の木々に積りし

雪を見てよめる歌　美奈井與志子

はるの花秋のもみぢにまさりけり
軒はの木々にふれるしらゆき

女鑑歌文兼題　自三月至六月

三月
- 五日　歌……餘寒　文……山莊を祝ふ
- 廿日　歌……山家梅　文……樂しみ

四月
- 五日　歌……野遊　文……盆栽
- 廿日　歌……對花旨志　文……遠國へ出て立つ人をおくる

五月
- 五日　歌……新竹　文……新茶をおくられし返し
- 廿日　歌……夕水鷄　文……蛙を聞く

六月
- 五日　歌……曉郭公　文……雨中待友
- 廿日　歌……夏[illegible][illegible]　文……朝顏

女子書牘文論　　菅喜田收　目黒和三郎

文學小傳　　難波津逸香

女學雜誌

第四百三十三號 一月十日發行

◎口繪●獨逸國カウルバツハ氏畫 迎護◎御埋葬◎社説●御園藝◎信心堅固なるべし◎家庭●家庭の樂は小事より成る●火鉢のほとり●大望なる商人●物價騰貴●一家備付の天秤●御馳走●生計の度合●山師●失敗者を看護せよ●女子手藝案内(二)みよしの●よひとり言 紫琴女史◎文藝●小説家と同情(一葉全集を讀む)鷗村●和歌數首◎史傳●史料散錄(二)如雲◎問答●難める友の爲めに問ふ答◎講義●炭と薪(附門馬夫人の薪商)曲浦子◎雜錄●村夫子 さよ女◎片々錄◎隨感●『迎護の圖に題す』に非ずや●人心の機轉●去年今夜さは何物ぞ●人智本來兒戲●かたみこそ今はあだなれ●御大赦●造り花◎時文●投書●片々。

每月二回 十日 二十五日 發行

一部定價金十錢
半年前金壹圓
●見本を要する方は郵券十錢を送らるべし

東京市麴町區下六番町六番地

發行所 女學雜誌社

東京神田表神保町

一手賣捌 東京堂

女鑑第百貳拾六號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年二月廿六日印刷
同　年二月廿七日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)